

オーストロネシア語圏の 言語文化 (その3)

前々稿 (その1)

ポリネシアの書記言語

—イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo—

前稿 (その2)

オーストロネシア語圏の神話

本稿 (その3)

日本語の起源

日本語の起源

河崎 靖

序

日本語の系統問題は日本の言語学の大きな検討課題とされてきた¹。日本語と親縁関係にある言語が仮にあるとしても、それ(ら)が祖語から分岐してから文献記録として書き残されるまでの長い先史の間に本来の言語特徴が失われ、それゆえ両者(日本語・親縁関係が想定される言語)が系統関係が不明になるほどの変化を蒙ったという経緯に基づくのである²。したがって、日本語の系統が一気に具体的な形で明らかになる可能性は低い。その歴史は性急な答えを許さないほど悠久である³。

日本語は、日本列島における縄文時代を通じ、長期間にわたる複数の諸言語との併存、および、それらの言語との言語接触の結果、遅くとも弥生時代に、混合語として成立したことは確かであろう。その際、古代日本語においてピジン・クレオール化(すなわち言語混合)がすでに進んでいたとみなすのが自然である。つまり、古代日本語はすでに複数の言語を基本的要素として含みつつ形成されていたと見ることにより、日本語の系統論が新たな展開を見せる可能性があると言えるのではないだろうか。逆に言えば、世界で系統が未だ不明な言語には、民族語として非常に長い歴史があり、長期にわたる言語接触により混合現象が発生したと想定するのが無理のない説明であろう⁴。

そもそも、日本列島の歴史を考察するにも、農民・漁民ではない、漂海民のような人々の存在を想定することを通して解明できる諸課題も少なくないように思われる。倭人(日本人)も、オセアニアのポリネシア人のように、海上活

動に長けた、外交的な農耕・漁労民であったとも考えられ、事実、年齢階梯制・二重王権⁵など共通する文化的な側面がある。東南アジアの漂海民と類似した生活形態をもった人々が九州や瀬戸内を本拠として活動していた可能性も十分にあり得る。このような民の集団の中から、古代の海人族が生まれたのであろう⁶。

1. これまでの先行研究

日本語の系統が未詳である以上⁷、言語学者ならば、この問題に立ち向かう他ない⁸。泉井（1975:III）が述べているように「日本語系統論は、一般社会的に大きい興味を持たれ、また世に最も実害の少ない好個の話題の一つとして、主として肯定的な態度のもとに取り扱われてきた」という経緯がある⁹。併せて、泉井（1976:348）が「全体として見たところ、日本語の系統関係の方法論的に説得的な説明は、将来も容易に達成されることはない」と懐疑的に述懐している点も見逃せない¹⁰。

これまでの先行研究史を概観し、現況を語るとすれば、日本語の系統の究明に議論が百出する理由としては、

- ・その内部における音韻史が十分に明瞭でないこと。
- ・語の構成様式（造語法の原則）が明らかでないこと。
- ・体系的な比較にたえる同系の（諸）言語がないこと。

等が挙げられようが、これらの諸点にしても、日本語が形成されてからの歴史的な深さによるものであると言えよう。日本語の源流を探るアプローチがそう容易くないことははっきりしている。歯切れは悪くなるけれども、日本語は他のいかなる言語とも語族を形成せず、未だ系統関係が不明な孤立的言語であると言う他ない¹¹。そもそも言語の系統とは何かという根本的な課題に立ち返ら

日本語の起源

ざるを得ない状況なのである。併せて、日本語が形成された歴史的背景にも焦点を当てて議論を進めないといけない。

さて、日本語の系統を問うという課題は、古く 19 世紀半ばから外国人研究者を中心に提起されるようになった¹²。その当初から現在に至るまでの研究史を俯瞰的にまとめると、およそ次のようになろう。まず戦前のものでは、

新村出（1911）「国語系統の問題」¹³

金田一京助（1938）『国語史の系統篇』

が挙げられる。そして戦後の論考の中で比較的まとまったものとしては¹⁴、

村山七郎（1961）『国語系統論・比較研究の歴史』

亀井孝（1963）『日本語の系統』

池田次郎・大野晋（1973）『論集 日本文化の起源』

村山七郎・大林太良（1973）『日本語比較研究の歩み』¹⁵

泉井久之助（1975）『マライ・ポリネシア諸語——比較と系統——』¹⁶

小沢重男（1976）『日本語の系統』

があると言えよう¹⁷。いずれの論考も従来の諸説およびその方法論を建設的に批判し自説を展開している¹⁸。ただ、現状としては結局のところ、日本語の系統というテーマのもと提唱されてきた数多くの考察をもってしても、学界の承認が得られるような形で日本語と同系であると証明された言語は皆無であり¹⁹、日本語の系統はやはり現在に至るまで不明のままであると言わざるを得ない²⁰。ただ、この日本語の起源という課題はたった 100 年ほどの間、新しい諸説が現われては消え、消えては現われるのを繰り返してきた、いかにも果てしなくロマンのあるテーマではあると言えるかもしれない²¹。

これまで日本語の起源に関し行われてきた諸々の考察が提示している学説

日本語の起源

は実際はかなり多岐にわたっており²²、世界中の実にさまざまな言語が日本語の同系言語として提唱されてきた²³。『日本語の歴史1』（亀井孝 編、2006 年）によれば、それらの諸説は以下のようにまとめられる²⁴。

（1）北方アジアの諸言語に系統を辿る²⁵

- ・（ウラル・）アルタイ諸語の一つとみなす説²⁶
- ・朝鮮語と結びつける説

（2）南方アジアの諸言語に系統を求める²⁷

- ・マライ・ポリネシア語に属するとする説²⁸
- ・チベット・ビルマ語と結びつける説

（3）印欧語に結びつける説

（4）その他²⁹

こうした分類の中のいずれの学説も、これまで証明に成功したものはない³⁰。学者たちの究明の努力に拘わらず、日本語の1方言と目すべき琉球語を除いて、日本語と同系であることが明らかにされた言語は1つもないのである³¹。

2. 日本語「形成」論

古く石器時代にはアイヌ民族が日本列島³²に住んでいた。考古学の視点からしても、日本列島はさまざまな先住民族のいわば吹き溜まりで、いろいろな異なった集団が集まり住んでいたと想定される³³。こうした事情が日本列島の言語の形成には根本的な影響を与えたであろう。確かに何らかの意味で核となった流れがまずあり、そこにいくつかの他の流れが次々に合流し、やがてい

わゆる日本語と称すべき言語が成立したという経緯を考えなければならない。そもそも系統という見方が日本語の由来を見えにくくしてきた。日本語は、印欧語のように1つの祖語から次第に枝分かれする形で成立した言語ではない。さまざまな流れが合流して、やがて1つの流れが形成されたとみなすべきである³⁴。

日本語の系統を検討する際には、まず、そもそも複数言語が混淆して、それらの文法がちょうど中間段階のような状況を呈することがあり得るのかどうかを問うことから始めねばならない³⁵。古くはフランスの言語学者メイエが1924年「史的言語学における比較の方法」という連続講演（オスロ）において、

今日まで、ある言語の形態論（モルフォロジー morphology）の体系が二つの異なった言語の混合に由来すると仮定せざるをえないようなケースは見つかっていない。今日まで観察されたあらゆる場合に一つの言語が連続的に伝わっている。

と述べているように、ある言語がどんなにたくさん外国語から語彙を借用しようとも元からの文法形態は維持されるであると主張している。例えば英語はフランス語から多くの語彙を取り入れているとは言え、文法の中心的な部分である母音交替（Ablaut）、あるいは、基礎語彙にあっては、あくまでゲルマン的な様相を示しているわけである³⁶。さらに、メイエは著書『史的言語学における比較の方法』³⁷で、より明確に「一個の与えられた言語の形態法の体系が、相異なる二つの言語の形態体系の混合に由来すると考えかねられないような場合に、われわれはいまだ遭遇したことがない」と言い切っている。すなわち、1つの言語の系統が複数の言語に由来することはあり得ないという立場である³⁸。このメイエと同様の趣旨の発言をブルームフィールドも『言語』（1933）で行っており、彼は「二つの言語が均斉に混合し、そのためどの部分が根幹でどれが借りものであるかを歴史家が決定できないようなものを想像はできる

が、こうした混合が実際に生じたかどうかはわからないし、このような異常な混合の具体的なケースを誰も知らない」と言明している³⁹。

一方、ここで挙げたメイエやブルームフィールドのいう系統論の視点とは異なる論点として、複数の言語要素の存在を前提とする「言語形成論」がある。言語の事象面で言うと、例えば英語の所有表現 (the choice of a wise man など) はフランス語の前置詞 *de* をなぞった形式。ノルマン・フランス語由来の形態法) は英語の構造における言語混合であると言えるであろうし、また、オセアニア諸語の文法体系について言えば、動詞の他動詞化の接尾辞 *-im* は英語の3人称単数代名詞 *him* に由来するという現象があり、この接尾辞など混合語として重要な文法的要素である。このように複数の言語から文法要素が提供されて1つの言語が形成されるという言語混合の事例は実際に見受けられる⁴⁰。

ここで言う言語の混淆の問題と並行する大事な観点として、比較言語学よりも時間・空間を拡げ、いわば人類史という巨視的な捉え方からすれば、農耕・牧畜などが発展する前の社会では、小言語群というあり方がむしろ常態であるという見方があり得るであろう。小言語群の安定した共存状態のことを Dixon (1997) は *linguistic equilibrium* と呼んでいる⁴¹。こうした視点からは、縄文時代の日本列島の言語分布が、例えばパプア・ニューギニアのパプア諸語、もしくは、北米太平洋岸と同じ程度に複雑多岐であったか（この点にはわかに判断できないけれども）どうか、少なくとも今日のような単一均質な状況でなかったと見るのが自然であろう⁴²。亀井 (1973:67ff.) が指摘するように、日本語の形成には複数の異なった言語が関与していたとする論点が無理のない着想であると思われる⁴³。考古学など他の隣接領域の成果から推測できるのは、せいぜい、5千年くらい前の日本列島には多くの小さな集団および諸言語あって、人々の交易は千キロを超える遠距離のもので、通商のための交易語的なことばもあったであろう、そして数千年がすぎて日本列島の西部を中心に大陸・半島からの移民が始まったのであろうということまでである⁴⁴。

そもそも言語接触（言語 A・言語 B）の仕方にはいろいろな場合がありうる。

文化的・社会的・時代的背景が異なるわけであるし、それぞれの言語が置かれた力関係やバランスも様でない。したがって、発生した現象を直ちにモデル化するのとは適当ではない。個々のケースをとらえて敷衍しようとしても、それは現象論にすぎず、安易に一般化してよいということではない。むしろ言語形成論は、混合語（ピジン・クレオール）であっても、その成立のプロセスを1つの言語の歴史において検証していくアプローチが有効であろう⁴⁵。

言語形成の具体的事象として挙げられるものの一つに、オーストロネシア語から日本語に混成語⁴⁶として伝播したとされる基礎語彙がある。例えば、*mata「目」、*taŋan「手」、*qumbi「ヤマノイモ」、*lahud「遠い（方位）」、*paRi「南・南風」、*punay「鳩」などが意味変化を伴いつつ日本語に痕跡を残している⁴⁷。

このうち*paRi「南・南風」について言及すると、*paRi「ガンギエイ科(Rajidae)・南十字星」⁴⁸という民俗語彙は、古代日本語*fayiを経て、上代日本語ハヱ hayiが「南（風）」と併せて魚のガンギエイ科（アカエイなど）という意味をもつ。これは、南十字星とガンギエイ科が同じく菱形をしているという共通性によるものである。ハイ・ハエは琉球で「南（風）」を意味し、西日本全般にも広く分布している。大航海時代に先んじて、オーストロネシア人は南十字星を航海の時に天の南極を測るために用いており、南十字星には北半球の北極星に相当する役割があった⁴⁹。なお、隼人（ハヤト）「南の人」もハイ・ハエと関連するという考え方もある。ただ、オーストロネシア語族の先人たちに比べれば、古墳時代（現代の日本語の母体となる言語は複数の言語の混合を通じてすでにできあがっていた）に移住した隼人が日本語の形成に与えた影響はもはやほとんどなかったであろうと想定される⁵⁰。

その他、「筏」・「海風」・「鯛」・「松」・「竹」や、「神々のいる上界」・「中空・あの世」（その後に生まれた新たな価値体系の中にリセットされながら、その語彙自体は営々として日本語に受け継がれている）が、縄文時代後期よりオーストロネシア系語彙として伝承されている⁵¹。このように縄文時代から何度かにわたってオーストロネシア語の影響が日本列島に及んでいるため、オースト

ロネシア語と日本語の間には数多くの同語源の語彙があると考えられる⁵²。

日本語と他の言語の間に語彙の対応が一定程度、見出されれば、すなわち音対応の規則性がある程度、見つければ、日本語と同じ系統であることが証明されたとされる手法では不十分である。日本語の起源を解決するためには、語彙の大まかな比較ではなく、特別な範疇の語彙を比べてみるのが要請されるべきであろう。いわば文化的にいわば中立とされる基礎語彙に対して、片や、民俗語彙とされる語彙群は基本的に口頭で伝承されてきた語彙であり、文化と深い関わりをもつため、言語の系統を検討する際にも重視されるべき性質のものである。以下に、オーストロネシア語族に語源をもつ代表的な⁵³ 日本語の民俗語彙を示してみる⁵⁴。

*bəRas 「脱穀した穀物（ヒエ・コメなど）」⁵⁵

上代日本語の *hiya-i 「ヒエ」⁵⁶ は、オーストロネシア祖語に語源をもつ。これは規則的な音変化から証明される（古代日本語 *fiya）。語末の -i は限定的後置詞で「そ（田畑）の」ある。イネ科のヒエ（*Echinochloa esculenta*）は縄文時代に栽培化が始まっていたとされ、日本列島に渡来したオーストロネシア人は、列島で主要穀物であったヒエを「脱穀した穀物」とみなした⁵⁷。

ヒエは、米・アワと並んで祭事において重要な役割を果たしている⁵⁸。宮中の新嘗祭に際しても用いられる⁵⁹。天皇が神に捧げ、自らもこれを食べる穀物にヒエが含まれていことは、ヒエが単なる米の代用食ではないということをも語る。

インドネシアで、ほぼ全域で bəRas 系のことばがコメを意味するのは、紀元前 2,500 ～ 1,500 年頃、フィリピンで穀物一般からコメに意味的に特化した語がイネと共にフィリピンからインドネシア方面に拡散したからである⁶⁰。

日本語の起源

*inay (フィリピン祖語)「イネ科 (Poaceae) の種類、ススキなど」

上代日本語イネ inë「伊秬」は『万葉集』(14:3459)に現われる⁶¹。「伊秬都氣波 可加流安我手乎 (いねつけば⁶² かかる⁶³ あがてを) 稲を搗くのであかざれになった私の手を」。

イネは水生植物で高温多湿を好み、日本には縄文時代晩期までに渡来し、初めは北九州で栽培され、徐々に近畿・東海・関東から東北地方にまで広がったと考えられる。

長江流域にある草鞋山遺跡のプラント・オパール (植物の細胞組織に充填する非結晶含水珪酸体 $\text{SiO}_2 \cdot n\text{H}_2\text{O}$) 分析によれば、約 6000 年前にその地ではイネが栽培されていたという⁶⁴。

*zawa「穀物類」

古ジャワ語で jawa「雑穀類」、タガログ語で dawa?「イネ科コアワ *Setaria italica*」である。

祖語形の語頭音 *z は音法則通り古代日本語で *s に変化する⁶⁵。*zawa にはサンスクリット (yawa) 語源説があるが、台湾ではすでに古くからアワが栽培されており、当時まだサンスクリットの影響はなかったと考えられる⁶⁶。日本でも古代より主食にされていたとみられる。イネより早く日本に伝来し、縄文時代には栽培されていたことが確認されており、日本最古の穀類作物とみなされる。アワは日本古来の五穀であり、新嘗祭の供物としても米と共に用いられる。

上代日本語のアワ「禾 (呉音ワ ua)」には、奈良時代から発生していた歴史的仮名遣いの混乱が指摘される。山城国 (京都) に残る古地名「アワた」は粟田であるが、『名義抄』は「アハタ」と記している⁶⁷。

ここまで上で概観したようなイネ関連の語彙は、オーストロネシア祖語を語源として意味変化を考慮しながら説明することができる場合が少なくない。これは必ずしも、オーストロネシア語族が日本列島へ渡来した時代⁶⁸に稲作（と共にその関連語彙）を伴って移住したということではない。稲作の伝播に関しては諸説あるが、ブル系イネ（主にインドネシア・フィリピン・台湾など熱帯島嶼域に分布。遺伝的諸形質はジャボニカ種に近い）が南島を北上し日本列島に達したとすると、その時期は縄文時代晩期をさらに遡るとされている⁶⁹。この品種（ブル種⁷⁰）はジャワ島・バリ島・ロンボク島で古くから栽培されており、スンダランドあたりがその発祥地と考えられる⁷¹。

日本のイネの原産地が長江流域にあったとしても、繰り返し⁷²渡来したオーストロネシア語族が日本に稲作を伝来させた仲介者として介在した可能性は十分に想定される。船を乗りこなすことが巧みであったオーストロネシア語族が自らの島でも栽培していたイネの稲粍を日本に運んだという経緯である。近年の研究からも、ジャボニカ種のイネの起源値は長江中・下流域とは限らず、フィリピン・インドネシアまで辿れることが遺伝子変異の比較調査を通して明らかにされている⁷³。当時の日本の主要穀物はヒエであったため⁷⁴、稲作を伝えた渡来民も集約的な稲作がすぐに開始されるということではなかったが、オーストロネシア系の移民は併せて、ハタ「畑」・サワ「沢」という語彙も日本にもたらした。

*pa(n)daŋ 「原野」

タガログ語 paraŋ「草地」が関連する語彙である。上代日本語（万葉集18:4122）では「麻吉之波多氣毛 安佐其登尔 之保美可礼由苦（まきしはたけもあさごとにしほみかれゆく）種を蒔いた畑も日ごとに枯れほそってゆく」のようにハタケ波多氣とある⁷⁵。

*sabaq 「灌漑した田畑」

マレー語 sawah 「水田」、フィジー語 ōava 「収穫期」が関連する語彙であり、古代日本語 *safa を経て上代日本語のサハ「佐波」となる。関西で湿地を指す地名サワが関東では谷川を意味する。

イネはもともと熱帯原産であるため、生育のためには豊富な水と暑さが必要である。またムギなどの穀類の栽培と比較して、単位面積当たりに、より多くの労働力を集中させる必要がある。稲作が定着していった時期には、水田に接した高みに畑を拓き、ヒエ・ムギなどの穀類を副次的に栽培するという姿が見られたであろう⁷⁶。

3. 比較言語学を超えて

かつて日本人のルーツを考える仮説の一つとして、柳田国男の「海上の道」が注目されたことがあった。具体的に言えば、太平洋を流れる黒潮に古代日本人の足どりを求める、すなわち、日本を太平洋の広がりの中で捉えようとする考え方である⁷⁷。具体的には、北東アジアからベーリング海峡を経て北米北西海岸に至る環北太平洋地域に残る、系統や種類の異なる多様な言語⁷⁸がひしめき合う複雑な言語圏のことで⁷⁹、日本語やアイヌ語をはじめとする系統不明な諸言語が該当する⁸⁰。アメリカ大陸の西岸部は環太平洋圏の一部であり⁸¹、アジアからアメリカへ的人类（モンゴロイド）の移住としてシベリアからアラスカへのルートが想定される⁸²。ユーラシアからのアメリカ原住民の移動は徐々になされたものであろう。これは、南北アメリカ大陸における言語分布の複雑さ、あるいは言語構成の多様性から推察される。

これまでのところ、比較言語学の研究成果として解明され現在わかっていることは、ユーラシア大陸には印欧語族・セム語族・ウラル語族・アルタイ語族

日本語の起源

(諸語)・ドラヴィダ語族・チベット・ビルマ語族が言語グループとしての語族として確立されており⁸³、これらの諸言語が急速に勢力を広げた時代（今から5千年前以内）には、周縁の言わば古い言語は駆逐される運命にあったということである。地域的には、東北アジアの沿岸部、南太平洋、環太平洋、北西アメリカの、系統関係が定かではない言語がいくつか残ることになったというわけである⁸⁴。この中に、日本語・アイヌ語・朝鮮語などが含まれると考えられる⁸⁵。このように、祖語をたて系譜図を辿って言語の歴史を遡及的に探るという、伝統的な比較言語学の手法が有効なのは、現在から振り返って時間的にこのくらいという限度（およそ5千年前）があり、比較法によってたどれる言語間の同系関係はせいぜい5～6千年の年代幅に限られ⁸⁶、印欧語比較言語学で採られた比較法のアプローチでは日本語の起源を解明するのは難しいと思われる⁸⁷。

従来、日本語の系統に光をもたらすと考えられてきた比較言語学は、本来的に厳密な学問的手法として、系譜関係の明証となり得る複雑な形態論、および、質量ともに秀でた言語史料を併せもつ印欧語族のもとで成立・発達した方法論である⁸⁸。原理的には、このアプローチを用いれば、恣意性を払拭しつつ諸言語の同系性を客観的に証明することが可能である⁸⁹。けだし、A言語とB言語が祖語X（もとよりこの想定自体が虚構）の姉妹語であると仮定し得るのに、印欧語のように高度に複雑な屈折をもち、とりわけ多くの格が文法のあやを多彩に繰り広げている言語の場合は極めて理想的ではある⁹⁰。こうして、同一の系譜にある言語の諸要素の間に規則的な対応関係が在証されることを立証することにより、ヨーロッパの言語学（19世紀）は厳密なアプローチである比較方法を確立し自律した科学として歩み出した⁹¹。

ただ、日本語の起源に関する研究領域においては、おうおうにして現代のある特定の言語からの思い付き的な、あるいは、現代の複数の言語・方言からの寄せ集めの資料によって、いわゆる比較が行われ系統が論じられてきた場合が多い⁹²。日本語を含めた東北アジア沿岸部の言語について伝統的な比較法に

より系統関係を確立することが困難であったのは、これらの言語が世界の諸言語の中でも比較的、古い層に属し、発達・形成のプロセスが極めて長時間にわたる緩慢な分岐・収束の積み重ねによるものであったからだと考えられる⁹³。

一般に、2つまたはそれ以上の言語が同系とされるのは、それらの言語の文法構造や基礎語彙の中に何らかの類似が認められ、しかも、その類似が単なる偶然や借用によるものではないことが確認された場合である⁹⁴。比較法で特に重視されるのは基礎的な語彙や形態素における類似性である。同系関係にある言語の間では、見かけ上の類似ではなく、音法則（音韻対応）⁹⁵ などのような規則的な対応が見出される⁹⁶。すなわち、こうした同源語の共有が言語間の同系性の有力な証拠とみなされるわけである⁹⁷。ただし、1万年を超えるような過去にまで人類の言語史を遡ることはできないと言われている⁹⁸。ある意味で比較言語学によるアプローチ法の行き詰まり・限界であるともみなされる。しかしながら、言語の系統を解明する方法は比較法しかなく⁹⁹、この方法論は確かに単純な理論に基づいているが、極めて厳密な手続きと、当該の言語に関する膨大な情報の裏付けがある¹⁰⁰。

いずれにしても、オーソドックスな方法で日本語の起源という謎を解くという作業¹⁰¹は行き詰まっていると言わざるを得ない。1つの祖語という共通の源から枝分かれをした系譜図をたどり、言語の歴史を遡及的に探求するという従来のアプローチは、印欧語（今日から5～6千年前）に関する比較言語学には極めて有効であったが、現代言語学の研究の現状に即して、日本語がユーラシア大陸のどの語族にも属さぬことが明らかになった今、方法論をがらりと変えなくてはならない。日本語は、大陸のアルタイ諸語（モンゴル語・ツングース語など）のどの系統にも属さず、同じく系統不明の言語の1つである朝鮮語とさえも少なくとも5～6千年という時間幅では姉妹関係にないということが今日では証明されている。

日本語は、単系的な起源よりは、むしろ複源的な形成を問うべきだという認識が定着し始めていると言えよう¹⁰²。他に類例を見ない語族¹⁰³である環北太

平洋域には類型的多様性があり、言語類型論の深化に必要な得難い言語材が言わば手付かずの状態にある¹⁰⁴。形成論を棚上げしたままでは行きづまった日本語の由来問題に風穴を開ける‘break through’の可能性は望めない¹⁰⁵。そもそも系統関係の定かでない孤立した状況は日本語だけではない。環北太平洋域の諸言語はむしろ、こうした状況がおおむね普遍的であるとさえ言える。これらの言語がおのおの形成されてきた歴史的背景は、日本語と多少とも類似あるいは相通じる性質のものであると考えられる。この地域にあっては言語の系統的多様性がそれこそ自然な常態であったのであろう。

かつて日本やフランスの方言研究において、文化の中心部から遠く離れた地域に共通の現象が見られた場合、その現象は、言語文化のより古い層を示しているという捉え方があったように¹⁰⁶、環太平洋域の諸言語を観察する場合にも、よって立つ考え方は同様のものとなろう。言語間に存在する有機的な関連性を巨視的な立場から追求していこうという試みである。同系ではない諸言語間の言語の研究には、これまでとは違う新しい方法、総合的な視点から捉えようとする姿勢がどうしても不可欠である。比較言語学ではどうしても説明できない現象を解明しようと、借用・リングフランカ・言語同盟というような術語が登場してきたが、これらを総合するような理論はついに現われず、それぞれの現象は個々の問題として取り上げられたにすぎなかった。比較言語学はもちろん、言語類型論・言語地理学・言語接触の研究成果を取り込んだ、環太平洋の言語という構想でなければならないはずである¹⁰⁷。この際、印欧語など強い影響力をもつ言語が周縁の諸言語に及ぼした言語接触の結果も考慮に入れなければならないであろう。

日本語の系統が未解決であるということは、日本語の発祥の問題が伝統的な比較言語学のアプローチでは手の届かない遠い過去に遡るという意味にはかならない¹⁰⁸。比較言語学の射程を越えたもっと奥行き深い言語間のつながりを解明するには、時代と環境の変化に逆らって根強く存続する、言語の最も基本的な性格を形作っているある種の構造的特質や文法的カテゴリーを見出すこ

とが必須であろうと考えられる。すなわち、特定の言語に備わってその基本的な骨格を形作り、しかも言語変化に対して強い抵抗力を示すような特性を共有するような言語群を突きとめることである¹⁰⁹。これは、すなわち、語彙項目あるいは形態・統語構造の単なる類型化というだけにとどまらず、言語の基本的な骨組みを決定づけるような言語特質¹¹⁰の分布を、グローバルな視野から眺め、日本語が世界言語の中でどのように位置づけられるのかを明らかにするアプローチである。この作業は人類の言語史という大きな枠組みの中で、個別言語（例：日本語）の系統論的な位置づけを解明しようとするものである。具体的には、日本語の起源をめぐる従来の方法論をこえるメソッドとして、さまざまな言語特徴（例：形容詞が用言型か体言型か、あるいは流音のタイプ等）を典型的に分類し、その地理的分布を地図上にプロットする方法である¹¹¹。諸特徴の分布には一定の傾向が見られ、日本語と多く特性を共有する言語群が確定されることから、歴史的変遷が関連付けられるのではないかという見方である。過去に、音韻・形態・統語面で混淆言語として、言語が形成されたという痕跡を定式化できる可能性を秘めている。

4. 地域類型論的アプローチ

地域を超え複数の言語の間に類似性が見られる場合、これらの言語を話している集団の間に過去に何らかの関係があったことが想定され得る¹¹²。というのも、言語は語彙・文法体系など比較的まとまった状態で伝播する性質があるからである¹¹³。ただ、これまでの先行研究の明らかにするところによれば、琉球語以外に日本語と明確に類縁関係にある言語は現在までわかっていない¹¹⁴。地理的に近い位置にあるアイヌ語も朝鮮語も学術的な意味で親縁関係は証明されていない。こうした状況で方法論として期待されるのが地域類型論（areal typology）である。いわば伝統的な言語地理学の方法を、複数のしかも系統を異にする諸言語を包含する広域の言語圏にまで拡大適用したもので、

これにより、言語接触が複雑に絡んだ言語史の解明が本格的に試みられる可能性がある。言語特徴の地理的分布に焦点を当て言語史の解明を目指すものである¹¹⁵。このアプローチは、世界の言語の多様性を通じて人類の言語の普遍性を明らかにする言語類型論をさらに発展させて、従来の比較方法では捉え切れない諸言語の地理的発達の様相を浮かび上がらせるために着想された方法である¹¹⁶。

実際、太平洋沿岸言語圏を特徴づける言語現象の多くが太平洋を隔てたアメリカ大陸にまで拡がり環太平洋的な分布を見せることは大いに注目される¹¹⁷。日本語が位置する北部ユーラシアの太平洋側には、系統関係の定かでない言語が数多く集まっている。日本語の他に、朝鮮語・アイヌ語・ギリヤーク語（アムール下流域と対岸のサハリン島）、チュクチ・カムチャッカと呼ばれる小言語群（カムチャッカ半島～チュクチ半島）、エスキモー・アリュート諸語（ベーリング海峡を挟む地域）らが孤立した言語群である。すなわち、環太平洋・北アメリカ北西海岸域に、系統不明の言語が分散して分布している。日本語を軸に考えれば、日本列島とその周辺部に、系統的に孤立した言語や小言語群が比較的狭い地域に密集しているという状況である¹¹⁸。このように、環北太平洋域には、カリフォルニア・北西海岸・ベーリング海峡を越えて、次第に度は弱まりつつも、日本列島・朝鮮半島にまで連なる、系統と類型の多様性を伴った言語の蝸集^{いしゅう}のベルトとして観ることができる¹¹⁹。これらの言語集団が相互に接触を続け常態化し、その間に緩やかな分岐と収束を繰り返してきたと捉えられる¹²⁰。

確かに、環北太平洋域に広がる言語世界は類型的多様性の幅が広く、きめは細かい¹²¹。ただ、アジアとアメリカという、これまで別々に扱われてきた言語世界が、ある種の連続体とみなしうるならば、系統・類型のいずれを問わず、個別の言語あるいは語族の問題がより広い視野の中に捉えられる。日本語やアイヌ語も、この北東アジアから北アメリカ北西部に連なる類型的拡がりの中に位置づけてみると、それらの類型的特質は決して奇異には映らないであろう。

この言語の蝸集いしゅうは、その多様性の背景を考慮に入れると、言語の伝播、あるいは、言語混淆を生み出すメカニズムという一般的な問題を解明するのに有益な視点を提供するものである¹²²。次の指摘は、これまでの言語観を見直すに当たって重要な点を含んでいるように思われる。

彩り豊かな多様性は、たとえば旧大陸の印欧語とかアルタイ的言語のような、相対的に新しく広域分布をはたした言語によって一色に塗りつぶされない以前の、ことによると世界各地でむしろこれこそ常態であったかもしれない語族・言語の蝸集の名残をとどめるものであろう。(宮岡 1992:50)

とうてい実証的な証明は望めない問題提起ながら極めて興味深い視点である。

日本列島と、ほぼ同緯度にあるカリフォルニアを南限とする、北東アジア、および、北アメリカ北西部、これらの地域は、言語的に見れば、他に類例を認めるのが難しいと言っていいほど、世界的にも極めて特異な現況である¹²³。北東アジアに分布するのは、広域に広がるアルタイ諸語を除くと、いずれも系統が不明な孤立語や言語数の少ない小語族ばかりであり、話者数も（日本語・朝鮮語以外は）どの言語もかなり僅少な小言語である¹²⁴。系統不明の小言語・小語族のみが分布する、このような言語状況は、ベーリング海峡を越え北アメリカへと連なっている。北アメリカの特に北西部は、いずれも孤立言語・言語数僅少の小語族・話者数僅少の小言語ばかりであるが、比較的狭い地域にも拘わらず、北東アジアよりもはるかに数が多いばかりか、系統的にも多様な諸言語が注目すべきを蝸集を示している¹²⁵。

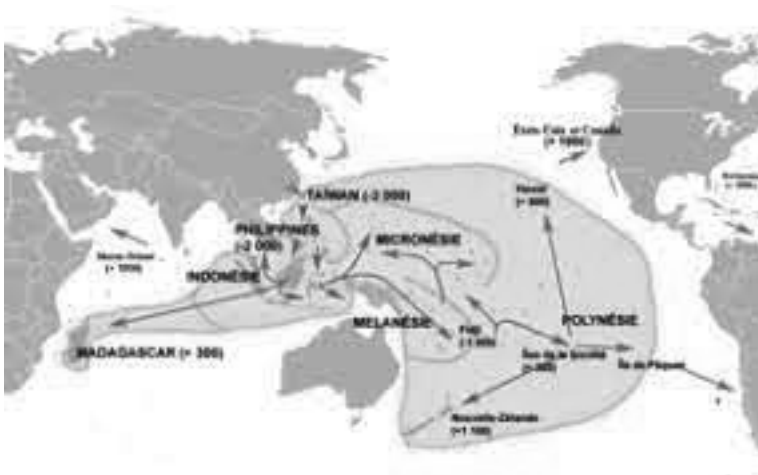
このように、ユーラシア大陸で印欧語族・セム語族・ウラル語族・チベットビルマ語族などがあり、アフリカではバントゥー語族、太平洋地域ではオーストロネシア語族などが挙げられ、これらは言語学的にはっきり縁戚関係が証明されている一方、日本語はこれらのどの語族にも属さない。どうやら東北アジアの沿岸部から南太平洋、そして環太平洋地域から北西アメリカあたりの所謂、

辺境に系統関係が定かでない言語がいくつか残っていると捉えるのが無理のない見方である。新しい言語勢力によって辺境に押しやられた結果ではないかと考えられる¹²⁶。環太平洋・北アメリカ北西海岸・ニューギニアなどにも、こういう系統不明の言語が分散した形で見出される。

さて、オーストロネシア語系¹²⁷との同源性が指摘されるのは、古い日本語の接頭辞の存在による。接頭辞は確かにアルタイ系言語には全く見られず、これに類する形態上の類似も見出されないため、アルタイ諸語との関連で接頭辞を説明するのは無理がある。逆に、オーストロネシア諸語には接頭辞が多く存在するので、日本語とオーストロネシア語系の諸言語との連関が注目されるようになったのである¹²⁸。ただし、日本語にある母音終わりの現象は、(ウラル・)アルタイ語系、ないし、オーストロネシア語系のどちらによっても説明ができず、母音終わりを特徴とする言語基盤としてX語(例：パプア語¹²⁹)があり、その上に(ウラル・)アルタイ語系・オーストロネシア語系が重層的に重なっていったという見方も説として十分に説得的である¹³⁰。

学界の通説として、オーストロネシア語族の源境が中国南部付近にあり、台湾を経由して東南アジア島嶼部からオセアニアへ拡散したとみなされているが¹³¹、近年、人類学¹³²の領域でも遺伝子情報に基づく研究が盛んになり、縄文人や弥生人を中心とする古人骨の遺伝子研究が進むにつれ、日本人の遺伝的多様性が明らかになりつつある¹³³。こうした研究成果から判明するのは、縄文時代より日本列島には多様な遺伝的特徴をもった人々が暮らしており、日本人の起源論が明らかにされるというよりは¹³⁴、むしろ、日本人の母胎となった人々の起源地が1つではなかったということである¹³⁵。

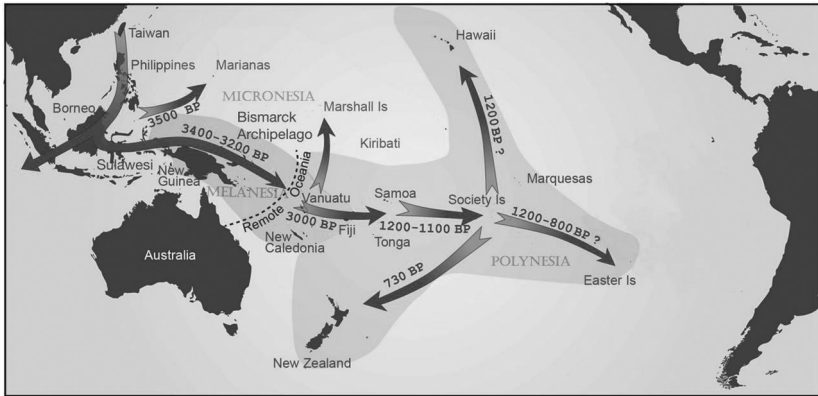
日本語の起源



オーストロネシア語族の広がり

ポリネシア人の先祖がミクロネシアあるいはメラネシアを経て、ポリネシア各地への移住の中心地であったと考えられるソサイエティ諸島へ到来したことをポリネシア文化誌の前半と捉え¹³⁶、以降、マルケサスへ、ハワイへ、またはニュージーランドへと移住していく過程を、その文化誌の後半とみなすことが一般的である¹³⁷。

日本語の起源



オーストロネシア語族¹³⁸

さて、文献時代以前の日本語、すなわち古代日本語には、文法的に機能し活発に用いられていたと推定されるいくつかの接頭辞があった¹³⁹。これらは奈良朝時代にもなお文証でき、後世、文法的説明が試みられている¹⁴⁰。中でも母音イという接尾形式が『万葉集』ではまだ生産的であり、頻繁に現われる¹⁴¹。このイについては機能の残存がかすかに認められ、通常の文法書で個別的に説明されている主要な特徴を¹⁴²、オーストロネシア語族との比較を考慮して整理すると¹⁴³、以下のようになる¹⁴⁴。

・代名詞：2人称（^{へんげ}貶下的¹⁴⁵）。

「イが作り仕へ奉れる大殿の内には意礼先づ入りて其の仕へ奉らむとする状を明かし白せ」『古事記』（中・神武）

・副助詞：体言につき特示強調。主語を代名詞で反復する用言形式¹⁴⁶。

「枚方ゆ吹き上る近江のや毛野の若子イ笛吹き上る」『日本書記』（継体）

・格助詞：場所¹⁴⁷。

「此の国土イ経を弘むるに頼る故に安穩豊楽にして違悩無からしむ」『金光明最勝王経』（平安初期訓点）

- ・接尾辞：体言につく¹⁴⁸。

「みつみつし久米の子等が頭椎イ石椎イもち撃ちてし止まむ」『古事記』（中・神武）

- ・接頭辞：動詞の語調を整える。

「天離る夷つ女のイ渡らす迫門、石川片淵」『日本書記』（神代・下）

このように相互連関的でなく説明される「イ」ではあるが、その意味的関連性から見て、もともとは同じ語（あるいは小辞）であったと考えられよう。この不変化詞「イ」は、対象となる人・物や、その人（その物）が現われる、置かれる、もしくは行われる場所を指示する機能をもち、「その・それ・そこ」という意味である¹⁴⁹。ここで見た古い日本語の「イ」の総合的な意味機能、つまり、指示的機能をもった代名詞（代名詞接辞）のはたらきは、原オセアニア語の、とりわけインドネシア東部からメラネシア地域にかけてのメラネシア語派を中心に見られる、独立（あるいは半独立）的な不変化詞 *i に、類似の現象が見出される。この「イ」を原オセアニア語の指示詞 *i に対応させて検討することが可能ではないだろうか。すなわち、オーストロネシア語族の類似する現象と対照させながら比較することが考慮されているのではないかと考えられる。

例証として次の諸例が挙げられる¹⁵⁰。

- ・人称代名詞

トラック語（トラック諸島）：1 人称単数 i¹⁵¹

日本語の起源

ビアク語（ニューギニアの西半部イリアンジャヤ州）：3人称単数 *i*

・後置詞：限定性

モタ語（モタ島）：*sasa-i*「名前（というもの）」

・格助詞：場所

モトゥ語（ニューギニア）：*hanua-i*「村で」

・接尾辞

目的語を強調する。

ピユマ語（台湾）：*kuriT-i*「皮を」

3人称代名詞目的語。

ティガク語（ニューアイルランド島）：*vis-i*「それをぶつ」

・接頭辞：間接目的語を強調する。

タガログ語（フィリピン）：*sulat*「書く」～*i-sulat*「（～のために）書く」

ここに挙げた例のとどまらず、原オセアニア語 **i* と古代日本語「イ」の並行的現象を例証することができる。意味的な集約性、そして機能的分化という点において明瞭な並行性が認められると言えよう。（従来の先行研究で指摘されてきたような）単なる表面的な語彙の借用にとどまらず、派生語の形成法といった言語内的な文法構造にまで同源性が濃厚となれば、それらの言語間の系統的關係にも重大な意味をもつことになる¹⁵²。総合的な観点からすると、古代日本語で活発に活用されていた接頭辞の由来に関して、やはり接頭辞をもつ言語としてオーストロネシア語族が関与したであろうこと、そして、中でも意味的・機能的な対応が原オーストロネシア語族と古代日本語との間に見出される事実から、日本語の最古の言語構造を専らアルタイ語系にのみ偏った見方

をするのは不自然であるように思われる。奈良朝時代の日本語が確かに、アルタイ語系の言語に特徴的な助詞・助動詞・接尾辞を中心的な役割とする文法的構造をもつとしても、接辞・助詞・語幹形成素の類を、言語類型地理論的にも、北方の言語からのみとせず、オーストロネシア語族からも受け継いで日本語が混合言語として形成されたとみなすのが妥当な視座と言えるのではないだろうか。

5. トランスユーラシア語族の可能性

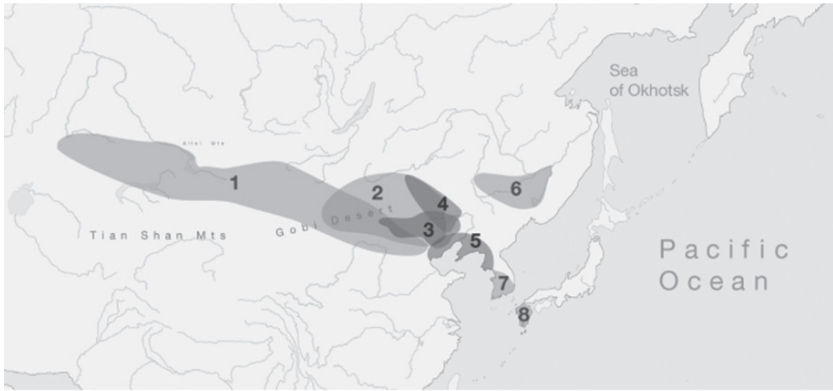
日本語の系統問題を解明することがいかに難しいかはよく知られているわけであるが、現在の起源論の状況を打破すべく新しい可能性を探るには、隣接の諸領域（考古学・人類学など）の知見も援用しつつ、従来よりもマクロな、巨視的なアプローチに踏み込むことによって新たな展望を切り拓く必要がある。具体的には、言語類型地理論や遺伝子系統地理論といった視点から、これまでの方法では手の届かない遥か遠い過去に遡る日本語の歴史の輪郭を提示し、これにより日本語の来源を少しでも明らかにすることである。

日本語の起源に関して実にさまざまな説が提唱され、多くのことが語られ伝えられてきた。その中の1つの有力な説として、日本語をオーストロネシア語系とアルタイ諸語との混合言語（アマルガム）だとみなす学説がある¹⁵³。確かに日本語はオーストロネシア語系の言語と文法・形態は異なるが、語構成法が類似しており、基礎語彙についても類似性が指摘されることがある¹⁵⁴。すなわち、オーストロネシア語族が日本祖語を形成した言語の1つであったとする見解である¹⁵⁵。ただ、オーストロネシア語族と日本語との関係については、今のところ、日本語の底層言語としてあるいは混合言語として関与したとみなすのはなお仮説の段階であり、未だ確定的なことは言えない状況にある。大局的に見れば、日本語には北方系と南方系の要素が認められ¹⁵⁶、系統的には基本的に北方系（大体においてアルタイ語系）であり、南方系は語彙を提供した

に留まるという大筋が通説ということになる¹⁵⁷。

日本語の起源の問題を捉えるのに、より総合的な視点から、すなわち、従来の諸説のうち有益な説のエッセンスを損なうことなく、個別の語族・語派のレベルを超えて広域にわたる視座からアプローチする術はないかという議論がある。例えばオーストロネシア語圏を超えて、類型的多様性を極める環太平洋域の言語世界を、より広い範囲の地域類型論 (areal typology) で切り拓くことはできないであろうかという考え方である¹⁵⁸。すなわち、日本の周辺にある環太平洋言語圏の諸言語がまだ環日本海言語圏において地理的に近いまとまりを形成していた時期に、言語の壁を越えて隣接言語に拡散していった類型的特徴¹⁵⁹を共有していたのではなかろうかという提唱である¹⁶⁰。従来から根強い、アルタイ系の言語からの作用をも加味した、日本語の全般的特性を網羅的に記述できるアプローチである。これまで大陸側からの影響というと、東部のステップから移動して来た「遊牧民」(紀元前 2000 ~ 1000 年頃)の移動・拡散が言語の分散に主導的な役割を果たしたと唱えられることが多かった。これに対し、歴史言語学・古代 DNA 研究・考古学の知見を結集して、東は日本・韓国・シベリアから西はトルコに至るユーラシア大陸全般に広範に分布するトランスユーラシア語族(農耕民)を想定するのである¹⁶¹。この考え方というのは、言語拡散・農業の発展経路を、遺伝学を中心とした人類学の観点を軸に据える着想に基づいている¹⁶²。

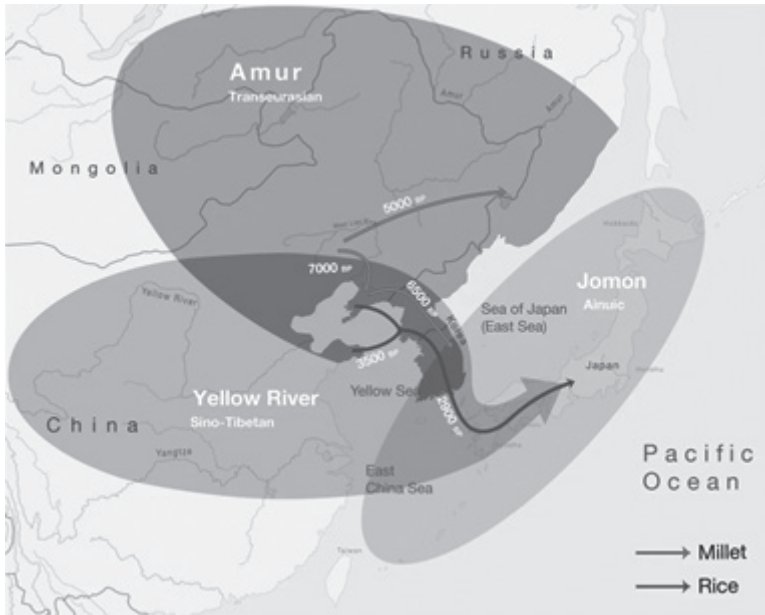
日本語の起源



- | | | | |
|------------------|--------------------------|-------------------------|------------------|
| 1 Proto-Turkic | 3 Proto-Transeurasian | 5 Proto-Japano-Koreanic | 7 Proto-Koreanic |
| 2 Proto-Mongolic | 4 Proto-Mongolo-Tungusic | 6 Proto-Tungusic | 8 Proto-Japonic |

新石器時代（3、4、5で表示）、および、青銅器時代以降（1、2、6、7、8で表示）に、トランスユーラシア語が話されていたと想定される地域分布が上のように示される¹⁶³。また、下図の日本列島を囲む円で表示されているのは縄文人の分布である。その地域に食い込む形で示されている矢印は、石器・青銅器時代の稲作の伝播を表わしている¹⁶⁴。

日本語の起源



165

農耕民たちが約 9000 年前に中国北東部の遼河流域から北東アジア全体に移動するにつれて、東方向には韓国・日本へと、また北西方向にはシベリア・ステップ地域へと諸言語が伝播したと考えられている。この語族の起源・普及・分布については、言語の分散、人口の分散、農業の拡大それぞれの立場からの活発な提案がなされている。いずれにしても、農業の普及（キビ栽培を開始した初期農耕民）によって語圏の拡大が促進されていったという学説である。この農耕民（地図の赤い矢印の根元）が北東アジア全般に拡散し、朝鮮半島を経て、弥生時代に日本列島に渡来したと想定される¹⁶⁶。青銅器時代に朝鮮半島にイネとムギが伝播し、それら農作物が約 3000 年前に日本にも伝播したとされている。

トランスユーラシア言語の起源は確かにアジア先史学の中でも激しい論争となってはいる。言語と文化の祖先関連性を検討すれば、最初の話者がいつ・どこに住んでいたのか、あるいは、その子孫の文化がどのように維持され相互に

作用したのか、そして数千年にわたるその言語文化の拡散の経路などになお不明な点は残るものの、新石器時代前期に西遼河地域でキビ・アワを栽培した農耕民の移住を¹⁶⁷、トランスユーラシア言語の起源・初期拡散と関連すると提示ことによって、トランスユーラシア言語に共通する諸点¹⁶⁸を説明する原理として有効であるように思われる。

トランスユーラシア語族とは、ツングース語族・モンゴル語族・チュルク語族であるアルタイ語族に日本語・琉球語、朝鮮語族を加えたものである。約9000年前の新石器時代、西遼河流域（中国の北西部）においてキビの栽培をしていた農耕民からトランスユーラシア言語が広範囲に拡散していったとの構想で、キビ・アワを栽培する農耕民が北東アジアへと広がっていったとする。南の黄河流域へ進んだトランスユーラシア言語の話者たちは稲・麦などの作物を栽培するようになったという説である。つまり、農耕が諸言語を拡散する原動力になったとみなす考え方である。

トランスユーラシア語はユーラシア大陸全体で見られる最も広く分布している語族の1つであり、正確な意味で、どこから来て、どのように広まったかはなお議論の余地はある。しかしながら、トランスユーラシア言語の系図グループ、ならびに、共通の祖先から出現した言語のグループとしての分類を支持する証拠が、98言語のトランスユーラシア系の言語から250を超える概念を表す3000を超える同根語セットのデータベース（言語学）、および、中国・韓国および日本の古人骨ゲノムのデータベース（遺伝学）、ならびに、北東アジアの新石器時代から青銅器時代の遺跡から出土した遺構・遺物のデータベース（考古学）から提示され、これらのデータを基に、トランスユーラシア言語の祖先コミュニティの時間的奥行き・地理的場所および分散ルートを解析し、言語拡散の「農耕仮説」を学際的に証明されようとしている。この地域の言語・農業・遺伝的拡大のパターンを総合的に追跡することで、以前はトランスユーラシア語族の分布は農業地域を超えていると考えられていたが、農業分布仮説がユーラシアの人口分散を理解するための重要なモデルであることが明らかにされる

であろう。

6. まとめ

日本語の系統として、現在までのところ判明していると言えるのは、日本語の語順や後置詞は「北方系」、開音節であることや、語彙（の一部）は「南方系」であるという点である¹⁶⁹。こうした現状の把握の背景にあるのは、一般に系統が未だに不明の言語には、長期にわたる言語接触による混合現象が起こっていたのであろうという想定である。例えば印欧語にしてみても、テキストが在証される以前において言語混合を経験していないとは限らない¹⁷⁰。印欧諸語の場合、その歴史は数千年単位での尺度であるが、これを超えて数万年のスパンで言語系統の問題を調べなければならないケースもむしろ少なくない。1 個別言語としての歴史が非常に長いがゆえに、その言語の世代間の交代と共に起こる内的な変化の他に、外部の言語に誘発されて起こる変化の蓄積も十分に考慮しないといけない。ある言語が形成されてから経過した年代の深度（万単位であればなおさら）もさることながら、その歴史の古さに起因する混合性がその言語の系統をわかりにくくするのである¹⁷¹。

かつてドイツの Alexander von Humboldt は、インドネシア・フィリピン・太平洋地区の系統的に関連する諸言語を「マライ・ポリネシア語」(Malayo-Polynesian) という語族として括り、その後のオーストロネシア語学の基礎を築いたことはよく知られている¹⁷²。彼が当時、稀少であったオヤングーレンの日本文法を、その出版地のメキシコで手に入れて、兄 Wilhelm へのお土産として持ち帰ったというエピソードは興味深い。ただ、おそらくこれもフンボルトが故国にもたらした資料の一部にすぎず、学術調査が目的であったフンボルトの遠征の際の 1 つの逸話にすぎないのであろう。かの有名な『ジャワ島のカヴィ語について』(Über die Kawi-Sprache auf der Insel Jawa, nebst einer Einleitung über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss über die geistige

日本語の起源

Entwicklung des menschlichen Geschlechts, 全3巻)で、フンボルトは、ジャワ島の古語であるカヴィ語 (Kawi)¹⁷³ に対して従来、抱かれていた誤った考え方(すなわち、その接辞にまで及ぶサンスクリットの借用語の多さに幻惑され、カヴィ語はサンスクリットの崩壊した言語であるとする見方)を退け、むしろその文法的構造においてはマライ語と関連付けさせられるべき言語であるという事実を明らかにしている¹⁷⁴。今日的な言語学の視点から見ても、ジャワ語はマライ・ポリネシア諸語の中でも最も古くから一番豊かな文献をもっており、最古の銘文は9世紀に遡るとされているほどである。ジャワ語には確かにインドからの布教的文化の影響の下に10世紀以降の文献があり、そのうちの1400年までの(特にマジャパヒット王朝の時代に栄えた作品の)言語がカヴィ語と呼ばれる¹⁷⁵。通常「古ジャワ語」¹⁷⁶と称するものはこれに当たる。以下のようなテキストである。

Nahan de sang **nâthâ** kēmita irikang **bhûmi** subhaga.¹⁷⁷

このように ~によって <敬称> 王 世話する その 国土 幸いな

古ジャワ語(カヴィ語)は事実、インドネシア諸語のうち比較的古い時代にまで歴史を復元することができる唯一の言語である。カヴィ文学¹⁷⁸は確かにインドのテキストを語レベルの厳密な意味での翻訳しているのではなく、隷属的にそれらを再現してはいるが、一方、口語としての古ジャワ語は文学語(書き言葉)よりもインド色が少なく、それだけインドネシア語的な性格が強かったと思われる¹⁷⁹。

ちょうど、このジャワ語に関する事例のように、歴史が古いという理由によって、日本語の内部に起こった諸々の変化に加えて、外部の言語から影響されて起こった変化も少なからず生じたであろう。ある言語の形成が万単位であれば、その歴史の中で生じた、他の言語と混合性のために、日本語の起源・系統の問題が複雑化していると言わざるを得ない。この意味で、むしろ学際的な隣接領

日本語の起源

域の新しい知見を援用しながら、これまでの北方系・南方系という諸学説の長い研究史からもたらされる有効な見方を活用する他ない。トランスユーラシア語族という視点は、北方系の立場をとる諸説と決して矛盾することなく、併せて、南方系の影響をも、直接的な接触であれ、間接的であれ（中国大陆・朝鮮半島を経ての）、日本語への関与を総合的にうまく説明する原理としてはたらく可能性を秘めている。

註

- 1 20 生起の終わりの 30 数年、マスコミも巻き込むやや派手な形で展開し、必ずしも学問的に見て望ましい論争に発展しなかった（吉田 2015:143）。
- 2 吉田（2015:145）。日本語の独自の特徴である動詞や形容動詞の活用などにぴったり合致する固有の特徴を示す言語も周辺地域に見つかっていない（吉田 2015:145）。
- 3 崎山（1990:485）
- 4 崎山（1990:8,120）
- 5 宗教的な指導者（聖王、女性側）と政治的な指導者（俗王、男性側）という二重支配構造のこと。邪馬台国の卑弥呼を彷彿とさせる。
- 6 後藤（2003:236-237）。後藤（2003:236）：「オーストロネシア語系海人は、男性が外交的で外洋漁労を行い、女性が内向的で農耕や珊瑚礁漁労を行う傾向がある」。
- 7 母語の起源・系統という問題には誰しも関心が向く。服部（1999:3）：「私は日本語の系統に興味を持って言語学を始めたと言っても過言ではない」。また服部はかつて「いやしくも、こと言語に関する限りは最終的・決定的発言権は言語学にある」と述べている（長田 2017:24）。日本語の系統をめぐる論争には専門家以外が積極的に関与してきたという経緯がある。松本（2007:1）：「日本文化の発祥や日本民族の起源という誰しも興味をそそられる問題と密接にかかわっていた」。
- 8 松本（2001:90）：「日本語の系統問題は戦前より戦後に入ってから、かえって先行き不透明あるいはむしろ混迷の度合いを深めたように見える」。
- 9 ただし、この箇所が続くのは「その真の肯定はむずかしい。この状態は、長く将来にわたっても、変らないであろう」である。
- 10 泉井（1976:349）：「ひとは日本語を玩具にしてはならない。『比較』ばかりが日本語の問題ではない」。
- 11 崎山（1990:4-6）
- 12 主に西欧の東洋学者・外交官による（ドイツ人 Klaproth、イギリス人 Aston ら）。佐佐木（1978:307,309-310）にその経緯が記されている。メイエ / 泉井（1954:390）：「クラブロート、[...] およびシーボルトなども同時にまた日本語の帰属の問題を考え、これを系譜的にウラル・アルタイ語に属せしめたのであるが、もちろんその所説には十分に学的な根拠が認められるわけではなかった」。現状は、

松本（2007:73）：「日本語の系統をめぐってすでに百年以上、内外の多くの学者が議論を重ね、さまざまな説が提起されてきた。しかし今なお、最終的な結論に達するにはほど遠い状況にある」というところである。

- 13 『太陽』 17 卷 1 号
- 14 大野（1952）「日本語の系統論はどのように進められて来たか」『国語学』 10 輯も示唆的である。
- 15 「日本語における非アルタイ語的要素に注目した結果、そこに、マライ・ポリネシア語起源とかがえうる要素をすくなくらずみとめた」（佐佐木 1978:337）という趣旨である。
- 16 マライ・ポリネシア語的な語彙は日本語の基層的要素であったと考えられる。崎山（2017:66）：「日本列島に最初に渡来した語族は、紀元前 2,500 年から 1,500 年にかけて、マライ・ポリネシア諸語からオセアニア諸語（メラネシア語派・ポリネシア語派）へと分岐する過程の言語変化を反映した特徴をもっていたと考えられる」。
- 17 他にも、川本（1986:316）：「南島語（オーストロネシア語族のこと）こそは日本語と同系の可能性のずば抜けて高い言語」など独自の見解（北方基層の上に南島語が入り込んで日本語が成立したとする重層説）が表明されている論考が個々に多くある。ただし、泉井（1975）で述べられているように、オーストロネシア語族の日本語への関与はあくまで語彙レベルにとどまり文法レベルで働いた形跡はないと見るべきであろう。
- 18 これら以外にも、泉井久之助（1953）・服部四郎（1999）ら幾多の有益な研究がなされてきている。泉井は、日本語と南島諸語は同系ではないが、南島諸語が日本語の基層言語であるとの見解を示している。同様に、村山（1978,1979,1988）はオーストロネシア語を年代的に（アルタイ諸語のツングース語に先立つ）古い層と捉えているのに対し、川本（1978）は別の見解を示しており、アルタイ的な基層の上にオーストロネシア語が重なったと解釈する。
- 19 崎山（2017:iii）：「昨今、広く生物の、そして人類の分類原理である DNA 分析だけを一人歩きさせて、あたかも言語系統に直接の関係があるかのように説く人もいるけれども、そのような論がどれだけ言語系統論に寄与し、方法論としての理解が得られるかは未知数である [...] 遺跡や遺物、DNA だけでは言語についての情報源にはならない」。また、崎山（2017:8）：「DNA は、言うまでもなく自然科学的分類原理である。これが文化あるいは言語の形成原理とパラ

- レルにしなければならない必然性はまったくない」。
- 20 松本（2001:89）：「日本語の系統あるいは起源の問題は、すでに 19 世紀の半ば頃から、当初は主に西洋の学者によって、また明治以降、西洋言語学の導入と共に、日本の学界でも重要な検討課題として取り上げられてきた」。
- 21 松本（2007:183）：「これまで多くの人々は、『日本語のルーツ』を尋ねて、ひたすらユーラシアの内陸部へと目を向けてきた。日本語の系統論が出口のない袋小路に陥ったまま今日に至ったのも、その当然の帰結と言わなければならない」。
- 22 メイエ / 泉井（1954:393）：「けだし世界においても日本語ほどひろく、さまざまに、他の言語に関係づけられようとした言語もなかったと思われる。[…] これらの試みはいずれも要するに断片的な言語事実の間におけるむしろ偶然的な『一致』に敢えて論拠を置かんとするものであって、特に学術的に考慮せられる価値に乏しいのはいうまでもない」。
- 23 松本（2007:4）：「日本語のルーツは、歴史言語学の専門家がこれまでも折に触れて指摘しているように、弥生時代を越えて縄文の過去にまで遡ると見なければならない」。
- 24 次の分類の中の、「アルタイ語」系言語（1 のうち）・南島語（2 のうち）、二つの「混合語」説が熱心に唱導されたが、「混合語」自体の存在の可能性が学史上、疑問視されている。
- 25 Comrie（1996:54,100）や Wurm（1996:373-374）も、日本語が Altaic と Austro-nesian の混合語であると述べている。1950 年から泉井久之助が「南島諸語」を基層とし、その上に「フィン・ウゴール諸語」の諸特性が加わって成立したのが日本語であると主張し始め、後者を「アルタイ諸語」に置き換えて「南島諸語」との重層的成立を唱えたのが大野晋であり村山七郎である（安田 2020:45）。
- 26 メイエ / 泉井（1954:394）：「主として我が国の諸学者のさまざまな努力によって、近年、その比較の資料は、事実上、次第に増加してはいるが、いまだ決定的なものをそのなかから抽出することができていない」。あるいは、メイエ / 泉井（1954:376）：「今日、日本語は朝鮮語とともに、普通はウラル・アルタイ語、ことにアルタイ語に帰属するものと考えられている。尤もその原語、およびその帰属の定立に必要な十分な学的論拠が確証せられているわけではない」。
- 27 千田（2020）は日本語の系統に関連させてパプア諸語について論じている。その論考の趣旨は以下のようなものである：「日本語の源流さぐりの中にパプア

諸語を取り上げた研究が以前あった（江 1974/1978/1980 など）。実質的には、類型特徴を恣意的に選んで類似を指摘したに留まったが、ただ、実体的なまとまりのないパプア諸言語が「パプア諸語」という名称が与えられ次第に実体化されていった経緯があったことは確かで、江のような研究が生まれてくる火種はあったと見ることもできる」。

- 28 メイエ / 泉井（1954:394）：「南島諸語に対する日本語の交渉は、大体において語詞の借用の関係であって、その間に系譜的な親族性を定立することは厳密には困難であろうと思われる」。また、さらにアボリジニ（オーストラリア）と、マライ・ポリネシア諸語、パプア諸語との親縁性を唱える説もあるが、これについて、メイエ / 泉井（1954:733）は「これは信ずることができない」と述べている。
- 29 アイス語系統説などが含まれる。
- 30 崎山（1978:144）：「日本語の系統論の山場はなんといっても動詞の活用体系の組織を明らかにすることであろう。それに対して南島語がまったく無関係であったのか、なかったのか。日本語の側からネガティブな証明をしてみればそれで済むところが、それができないところに、日本語の系統論の根本的な困難さがある」。
- 31 崎山（1978:140）：「原南島語と古代日本語との間の音韻対応関係を始めて示したのは泉井久之助である。泉井は、日本語は系統的には一つでやはり北方的・大陸的なものであるとし、南島語的な要素がもしあるとしても、その北方的な構図（音韻法・造語法・形態法・統辞法の体系）の下に潜む異系の要素の一つとみる」。
- 32 当時はまだ大陸の一部であった。
- 33 崎山（1990:9）：「縄文時代、日本列島に同じ言語が話されていたと考える必要はない」。縄文時代前期以来、東日本と西日本は文化領域として対立していたと想定され、日本列島は、風土的にいろいろの異なった民族、言語集団が吹き溜まりのように集まり住んでいたと考えられる。
- 34 崎山（2017:4）。一般的な系統論では、1つの言語の系統が複数の言語に由来することはあり得ないと考えられる。
- 35 混淆説という立場から村山（1973: II）は「日本語系統論も一見、諸説紛々として見えるように見えますが、比較言語学の立場から見て、学問的価値のあるのはアルタイ説と南島語説でありましょう。ところで両者は対立するもので

- なく、補いあうべきものであるというのが私の結論です」と述べている。また、大林（1973:7）は神話学者として「日本神話の場合において、南方系要素、それから北方系要素の両方があるということが非常に強く昔からいわれている」という発言をしている。
- 36 村山（1973: II）：「日本語のような混合言語の系統問題はじつに複雑で解明が困難であります。その研究は仮説の上に仮説をつみかさねるというような姿になりかねません」。村山（1979）は基本的に南方系説を推進し、日本語は南島系の言語と北方のアルタイ系言語が混合してできあがったものであるとする説を提起している。
- 37 メイエ / 泉井（1979:139-140）
- 38 崎山（2017:4）。それどころか、長田（2005:177）：「1990年代以降、混淆語研究はブームをむかえたといっている」。混淆語の定義にもよるが、音韻体系と形態が固有のものである場合、その対象言語は混淆語であるとは言えず、服部（1959:19）などは「音韻体系と形態が二つの言語の混淆であるというような言語は、おそらく有り得ないであろう」と述べている。
- 39 崎山（2017:15）：「渡来した言語と地元の言語の双方にピジン化は起こり得る。しかも、そのレベルは音韻、語彙に留まらず、形態やシンタックスにも及ぶ。それぞれの言語の文法部分が提供されて、新たな一つの言語が生みだされることすらある。このようにして生まれた混合語は言語の内部構造の問題である。[…] ピジンあるいはクレオールは言語使用の社会的現象であって、本来は次元を異にする概念である」。また、馬淵（1985:36）の言う「混成言語というものがあるのかないのか」という議論」は今日の言語学にとってますます重要であると言えよう。崎山（2017:16）：「複数の言語からそれぞれの文法部分が提供され、一つの言語として形成されたその言語を混合語という」。
- 40 崎山（2017:17-19）
- 41 併せて、宮岡（1992:49ff.）も参照のこと。
- 42 松本（2007:8-10）。崎山（2017:66）：「従来、メラネシア語派、ポリネシア語派と呼ばれた二つの語派は、オセアニア諸語に統一される」。
- 43 日本列島には古代から海を渡って多種多様な集団が各方面から来訪したというのは事実であろう。言語集団という形での共同体がいくつもあり、言語が必ずしも一つであったとは思われない。
- 44 <http://www.chikyukotobamura.org/muse/WoL060505.html>. 列島の東北部ではアイ

ヌ語などが使われていたと考えられる。なお、複数の言語の混淆の具合は図り得ないことも多く、また、日本語はクレオールであり、そのため系統関係が見てとりにくいという考え方もある。

- 45 崎山 (2017:3)。日本語形成論に対して、これまで国語学からの言及はあまり見られない。
- 46 混合語ではない。
- 47 崎山 (2017:11)
- 48 タガログ語で *pagi*、フィジー語で *vai*。
- 49 崎山 (2017:155-156)
- 50 崎山 (2017:232-233)
- 51 崎山 (2017:12)
- 52 崎山 (2017)。崎山 (2017:iii-iv)：「現在、日本列島に接続する地域の比較言語学的成果として明らかになっているのは、海洋民族であったオーストロネシア語族の数千年間にわたる純正な言語史で、時代的には日本の縄文時代後期以降にほぼ併行して進行している。したがって、オーストロネシア語族は、日本語との比較研究が極限にまで推し進められるという点では無視することのできない語族であると考えられる」。
- 53 以下の例の他にも、**baqəRuH*/**bəRu*/**quRu*「新しい」(タガログ語で *bago*、サモア語で *fou*)がある。古代日本語 **ayu* が上代日本語でアユとして見出される(『万葉集』17:4006)。大伴家持の歌の中「東風の風いたくし吹けば(あゆのかぜいたくしふけば)」(東風が強く吹き)という個所である。アユのかぜは東北風で豊漁をもたらす風とされている。季節のはじめに初物をもたらす「新しい」風という意味である。航海に適した初風という意味もある(崎山 2017:153-154)。また、オーストロネシア祖語には「魚」に対して **ikan* と **iwak* があり、**iwak* がより早く日本列島に伝わり、これに遅れて **ikan* が日本に伝わった。
- 54 崎山 (2017:136)：「これまで古代日本語における [...] オーストロネシア系語彙の存在に気づかれなかったのは、音韻変化、意味変化に対する大きな認識不足があったせいである」。
- 55 インドネシア語で *beras*「米」である。
- 56 原文(『万葉集』(12:2999))で比要と表記されている。
- 57 チャモロ語：fa'i「イネ」
- 58 イネの原産地は長江流域であるにしても、繰り返し(縄文時代後期、縄文時代

日本語の起源

晩期・弥生時代初期・古墳時代) 渡来したオーストロネシア語族が日本に稲作を伝来させた仲介者として介在した可能性も想定される(船を乗りこなすことが巧みであったオーストロネシア語族が自らの島で栽培していたイネを日本に運んだという経緯)。

- 59 このために宮中に献上するヒエを青森県などで栽培する制度がある。
- 60 崎山 (2017:137-138)
- 61 古代日本語 *inai
- 62 「搗く」=杵で打って脱穀・精白する。
- 63 「かかる」=あかざれになる。
- 64 最も古いプラント・オパールでいうと、岡山県の朝寝鼻貝塚中から 6000 年前のものが検出されている。
- 65 *s が消失した理由は不明である。
- 66 崎山 (2017:148)
- 67 奈良時代に語中・語末のハ行音がワ行音と同音になり、平安時代以降、語頭以外の「はひふへほ」が「わゐうゑを」と混同して書かれるようになったため、ハ行・ワ行の間の表記の揺れが甚だしい(崎山 2017:87-91,148-149)。
- 68 紀元前 2,000 年以降のことである。
- 69 渡部 (1993) など。
- 70 マレー語で bulu は「毛」という意味。粃に付いている髭のような芒のぎの部分のぎが長い。芒のぎがある種類は、無芒むぼうのものと比べると、未熟な技術でも成りやすく初期の稲作には好適であった。
- 71 崎山 (2017:217-218)
- 72 縄文時代後期、縄文時代晩期・弥生時代初期、古墳時代と分けて考えられる。崎山 (1990:13):「縄文時代前期(紀元前 4000 年頃)に人口の急増が見られるが、これは南方的な文化要素を含む地域的な特色をもっていた、そして次に弥生時代になると、水田稲作または焼畑耕作を伴って再び人口が爆発的に伸びる」。この二度の人口急増が二度にわたる南方からの民族の渡来と合致する。
- 73 Izawa et al. (2008)
- 74 イネ系から稲という意味変化が起こったのは、食文化において米が中心的に栽培されるようになったからである。
- 75 語末要素の「-け」は語源不明。ハタ「畑」は本来、焼畑の行われたところであり、ハタけ「畠」とは区別される。

- 76 地名・人名に残る米はヨネと読まれるが、ヨネの本来の意味は「砂（地）・砂利」であり、これは、稲粒を砂粒と見立てて、ヨネ＝「イネの砂粒」という見方から来ている（米粒を砂粒に見立てる意味変化がインドネシアのパプア州のトバティ語でも起っている（xiš「砂＝米」）。書かれた記録としては、『正倉院仮名文書』・『和名抄』に「与糶 yonē＝米の穀実」とあり、また、『名義抄』でもイネノヨネは「米の実」を意味していた。
- 77 石森・丹羽（2019:29-30）：「『海上の道』という雄大な構想は、日本文化を太平洋の広がりの中にとらえなおすための多くの示唆を与える」。
- 78 日本語・朝鮮語・アイヌ語・ギリヤーク語などは環日本海諸語と名付けられ、これらはユーラシア内陸型の孤立言語が点的な分布になっているのに対し、いわば塊となって現存している（太平洋沿岸型の孤立言語）。
- 79 日本列島は多様な人間の集団が混じり合って形成されていると考えられる。海も交易の道だったとも言えよう。
- 80 岩波書店編集部（2004:11）。元を辿れば中国南部あたりに住んでいた人類集団が、一部はアメリカ大陸へ移住（12,000年前頃）、あるいは一部は南太平洋の離島域へ移住（3,500年前頃）したと想定し（石森・丹羽 2019:27-28）、このプロセスのなかに縄文人の集団を位置づけることはできないであろうか。
- 81 松本（2007:181）：「ユーラシアの太平洋沿岸部と最も密接につながるのは […] ロッキー山脈の西側の狭いベルト状地帯に密集する北米西部の諸言語である」。
- 82 小野（2018:138-139）
- 83 アフリカにはバントゥー語族、太平洋地域にはオーストロネシア語族が在証されている。
- 84 言語学の現状に照らせば、日本語がユーラシア大陸のどの語族にも属さないということは明らかになったと言ってよい。
- 85 北アメリカ北西海岸・ニューギニアなどに、系統不明の言語が多く見出される。
- 86 松本（2007:7）。長田（2005:175）：「印欧語族をモデルとする年代測定法は他の言語には当てはまらない」。
- 87 1万年以上前まで系統関係を遡ることはまず不可能であるというのが言語学の一般的な見解である（斎藤 2020:253）。
- 88 崎山（2017:6）：「言語の比較は、できるだけ古形に基づき、それがなければ再構形によらなければとする比較言語学の基本的要請がある。再構形というのは、既知の同系の言語的資料から帰納的方法で導かれた、数学の最大公約数

にも似た特徴をもつ理論的音声形式であって、いったん建てられた再構形は、逆にすべての実在形への音韻変化を説明できるものでなければならない。その具体的な所在を経験的に実証することは難しい」。

- 89 泉井（1975:236-238）：「比較言語学の原則を無視しつつ、単に少数の皮相的な同似現象のみに依拠して、敢えて Swadeshism（言語年代学）を拡大・逆用し、進んでみずからこれに殉じた人々が東西諸方にあった。[…] 言語系統の探求には節度がなくてはならない。[…] 学問的に、日本語の起原にかかる雲はなお厚い。決定的に断案を提示して、この雲を払うことは容易ではない。日本語の起原と系統の問題は、窮極的にいって、なお長く、一つの＜開かずの扉＞であろう。[…] 日本語の系統問題は、今日以降も、間歇的に、あるいは周期的に、いつまでも議論がつづけられるであろう。しかしその議論は、同じ壺中の水を、長短・適否、さまざまに趣きのかわる匙をもって、改めて攪拌するにすぎないことも多いであろう」。
- 90 松本（2007:4）：「（日本語の同系語は）手の込んだ比較言語学まがいの手品を弄さないかぎり見つけれない」。
- 91 Franz Bopp (1841) Über die Verwandtschaft der malayisch-polynesischen Sprachen: mit den indisch-europäischen.
- 92 崎山（1978:136）
- 93 松本（2007:8）
- 94 松本（2007:76-77）
- 95 ここで謂う法則とは、自然科学の概念とは異なり、過去の事実の集約的知見ということである（崎山 2017:84）。
- 96 言語間の親縁性を確実に検証する方法は次の3原則を満たすことである（板橋 2001:106）：a. 基礎語彙の形態と意味が一致または類似・相似であること。b. 規則的な音韻対応を示すこと。c. 文法項目と形態素に一致が見られること。
- 97 ただ、言語間の同源語の間に何らかの対応の規則性を確立しようと古典的な比較方法では、日本語を周辺の語族のいずれかと結びつける試みはなかなか難しい（崎山 2017:84-85）。
- 98 松本（2007:78-79）。言語は変化するという根本的な特性によるもので、伝統的な比較言語学による手法の限界である。現在の主要な語族（印欧語族・ウラル語族・オーストロネシア語族など）の推定される祖語の年代も、およそ今から5～6千年前あたりのところに落ち着く。「日本語の系統関係は、比較法

が有効な5～6千年という年代幅をおそらく超えている」(松本 2007:81)がゆえに、「古い言語層に属する数少ない貴重な生き残りと見ることもできよう。[…] 日本列島で縄文時代が始まったのは今から1万年余り前とされる」(松本 2007:82)。

99 庄垣内 (2002:121)

100 庄垣内 (2002:121) : 「言語の系統を解明する方法としては […] 比較言語学の方法しかない」。

101 すでに100年、新しい説が現われては消え、消えてはまた現われるという具合で、今なお学問的な意味で最終的な結論というにはほど遠い状態にある。

102 宮岡 (1992:381)

103 蝟集とは、一つの場所に多くのものが一度に群がること。

104 宮岡 (1992:382) : 「系統的多様性と類型的多様性の間の関連性」も私たちの関心を惹く。

105 宮岡 (2015:316)

106 千野 (1992:375)

107 千野 (1992:369) : 「比較言語学の力があまりにも大きかったためと考えざるを得ない」。

108 松本 (2007:10)

109 松本 (2007:10)

110 「話し手の認知の在り方や言語によるそのカテゴリゼーション、言語のいわば遺伝子型に相当するような特質」松本 (2007:82-83) のことである。

111 長田 (2005:179)

112 <http://www.yaponesian.jp>

113 斎藤 (2020:253) : 「十分な言語資料さえ残っていれば、たとえその言語を話していた人々がいなくなってしまう、死語になったとしても、比較研究はできる。[…] 言語間の関係を推定できれば […] 人間の移動についても、推定できる可能性が出てくる」。

114 日本語もアイヌ語も太平洋沿岸言語圏の北方群に位置する (崎山 2017:9)。

115 松本 (2007:82)

116 松本 (2007:83)

117 松本 (2007:181)。松本 (2007:184) : 「日本語の遠い同系語を列島の外部に探すのであれば、その視線は西方ユーラシアよりも東南アジア、さらにはまた

太平洋のはるか彼方、アメリカ先住民の言語へと向けられなければならない。日本語の母胎となった“環日本海言語圏”は、太平洋を取り囲むそれよりはるかに広大な“環太平洋言語圏”の一部にほかならなかったからである。

- 118 松本 (2007:75-76)。松本 (2007:76) :「言語の分布や系統関係の在り方は、アフリカ・ユーラシアとそれ以外（アメリカ・オセアニア）とでは大きく異なり、日本語のような系統的に孤立した言語の存在は、アメリカ大陸やオセアニアではむしろ常態と言ってよい」。さらに言えば、農耕前の社会においては小言語の蜃集いしゅう（一つの場所に多くのものが一度に群がること）がむしろ常態であるとする見方もある（宮岡 1992:49ff., Dixon 1997）。Dixon (1997) の用語では linguistic equilibrium（小言語群の安定した共存状態）という。これらの言語集団が相互に接触を続けながら長期に渡って共存し、その間に緩やかな分岐と収束を繰り返すとされる。

- 119 宮岡 (1992:49)

- 120 場合によっては、太平洋とそれを取り巻く島々が現状の地形をとるようになった地質学上の沖積世（今から1万年以内）というよりも、むしろ日本列島やアメリカ大陸がまだユーラシア大陸と地続きだったとされるウルム氷期にまで遡って、日本語の起源の問題は検討されることが想定されなければならないのかもしれない。

- 121 宮岡 (1992:49)

- 122 宮岡 (1992:49-50)

- 123 古い時期に由来する類似に関して、その要因が伝播によるのか系統に基づくのか峻別するのは難しい課題である。サピア (Sapir) は、恩師ボアズ (Boas) のように同化的影響が系統的問題が意味をもたなくなるほどに大きな役割を果たすとまでは考えていないようである。しかしながら、ボアズの伝播主義がサピアの弟子エメノー (Emeneau) に至って蘇り、言語混淆の問題が大きな関心・共感を得てきている。事実、ある語族の全言語にあって、周辺の異系の言語にないような特徴は見出し得ないと言われる（宮岡 1992:47）。

- 124 古アジア諸語という名称が使われることがあるが、系統関係によって積極的に結ばれた1つの語族をなすわけではなく、アルタイ諸語・ウラル語族に属さないという消極的な理由で一括された言語群にすぎない。

- 125 宮岡 (1992:5-6)

- 126 日本語・朝鮮語・アイヌ語・ギリヤーク語その他古シベリア語のいくつかで

ある。

127 オーストロネシア語族とは、台湾の高山族諸語に端を発して（オーストロネシア語族の原郷はアジア大陸南部（現中国の雲南省あたり）であったろうと考えられ、紀元前1万年頃にはその一派がすでに台湾に渡っていた。その後何千年間にもわたって、台湾から押し出された民族が現在の地域に広がったと想定される。後藤（2003:78-79）：「オーストロネシア祖語には（亜）熱帯性の作物や植物に関する語彙が数多く存在しているので、その源境は赤道周辺の（亜）熱帯地域であると考えられる」。この論点に関係すると想定されるのが「松」・「地震」・「冬」・「北風」等であるという）、アメリカ合衆国のハワイ語から、ニュージーランドのマオリ語まで広い地域に行われる諸言語の系統的総称のことである。西はアフリカ大陸南東洋上のマダガスカル島のマラガシー語から、東はチリ領であるイースター島のラバヌイ語までが含まれる（古くはマライ・ポリネシア語族（南島語族）とも言われていたこともある。なお、オーストラリア先住民の言語（アボリジニ）はこの語族に属さない。アボリジニはオーストロネシア語族が移動して来る以前の先住民族の言語である）。なお、書記言語としての歴史を有するのは、7～8世紀以降に、南インド系パッラバ文字による碑文を残したジャワ語・マレー語のみで（イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo は未だ解読に成功していないのが現況である。ロンゴロンゴは、ある特定の文字板が太陰暦と関連するという以外、文字板の内容は全く解明されていない）、メラネシア・ポリネシア諸語に文字の伝承は全く見られない（少なくとも他の地域でロンゴロンゴに似た文字は見出されない）。

128 板橋（2015:48）

129 ニューギニアではお互いの系統的関係が不明の数百のパプア諸語が話されている。同じ状況はオーストラリアの諸言語についても起こっている。

130 泉井は、再構された南島祖語と上代日本語の比較を初めて組織的に行った。泉井は約50語を取り上げて音韻対応則を検討したが、南島語と日本語の系統的な関係については懐疑的であった。

131 石森・丹羽（2019:19）：「そ（オーストロネシア語族）の一部が何度かの波になって日本列島にも渡来したというストーリーが考えられる」。

132 日本語の形成プロセスを考察するのに、考古学・歴史学などの知見の他に、遺伝人類学のような新しい学際的アプローチの成果をも取り込んで総合的に

捉える機運が高まっているのは確かである。言語学の内部にしても、言語類型地理論・地域言語学といった、伝統的とも言えるが、新たな学際的手法が取り入れられつつある。

133 石森・丹羽 (2019:23-24)

134 埴輪 (1990, 1993) によると、縄文人は南方系古モンゴロイドであり、弥生人は北方系新モンゴロイドであるという。古くから日本列島各地で、縄文人・弥生人の化石人骨が発掘されている。いずれもモンゴロイドであり、現代日本人につらなる祖先であるとされる。

135 小野 (2018:208) : 「日本の歴史や日本人の成り立ちを考える上でも、海や島の視点から読み直す作業は新しい発見をもたらしてくれるだろう」。

136 後藤 (2003:14) : 「クッカー一行は、広く南太平洋の島々に、きわめて均質な人々、ポリネシア人が住んでいることに驚いた」。

137 バック (1966:305-306)

138 オーストロネシア語の分布のうち西の端はマダガスカルまで広がっている。例えばワイキキのワイ「水」という語もマダガスカルでも見られる。マダガスカルも人種的にはアジア系である。なお、言語の分布と一致するのがアウトリガー・カヌー（丸太船の安定性を増すため船体の側部〈片側もしくは両側〉に言わば大きな浮きを付けた形のカヌー）の分布である。

139 崎山 (1990:101) : 「奈良朝の上代日本語では、そのような接頭辞のほとんどが形骸化し機能的に働くのを停止してしまった」。

140 強制的に用いられる、語調を整えるなどといった説明が多い。

141 崎山 (1990:14-15)

142 関係詞（連結詞）の起源が代名詞であること等は一般的な言語現象である。

143 このイは原オセアニア語の指示詞 *i と対応するであろう。崎山 (1990:15) : 「アルタイ系の言語、朝鮮語にはもともと純粹の接頭辞はなかった」。

144 崎山 (1990:101-102)

145 おとしめる・さげすむという意。目下に対して用いられる「そち」と同じ用法。

146 この表現は原オセアニア語の述語導入詞によっても行われる：トライ語（ニューブリテン島）：a pal i ngala. 「家は大きい」。

147 特定の場所を指示する機能である。ただ、動詞に接頭される例（イ抱く）は非常に多く、この場合、外部にあって動作の及ぶ場所ないし対象（「そこ」）がイによって指示されている。

- 148 接尾辞であったかどうかは確かに不確かで、先行する名詞を受けて「それを」を意味しつつ、前方照応的な接頭辞としてはたっていた可能性もある。このような構造的類型はパプア諸語（ニューギニア）にも典型的に現われる。
- 149 もともと自動詞と他動詞の形式上の区分をもたなかった日本語において、他動詞化の **-i* が動詞語尾の形式要素としてその機能の拡大化をはかったとも考えられる。
- 150 崎山（1990:105-107）
- 151 語源的に「それがし」の意。
- 152 範疇詞（対象となる名詞を食べ物・飲み物のように範疇化）のような文法特徴も検討すべき項目の1つである。
- 153 例えばロシアの言語学者ポリワールフは、主に日本語のアクセント史に関する考察を基に、日本語は起源的にオーストロネシア語族とアルタイ諸語との混合物（アマルガム）であると初めて主張した。こうした見解の背景にあるのは、日本語は、本州における縄文時代の終末期に稲作の技術を携えて朝鮮半島南部から西日本に渡来した人々の言語と、西日本の縄文時代以来の居住者の言語との混淆語である（また同時に、朝鮮半島から日本に渡来した人々の言語というのは、朝鮮半島の先住者の言語と、アルタイ系の征服者の言語との混淆語であるとみなす）という考えである。また、安本・本多（1978）は、日本語の基層言語として、アイヌ語・朝鮮語と祖語を同一にするという古極東語を想定し、後にオーストロネシア語系など南方の諸言語が順次、流入・混合して日本語が成立したという説を唱えている。
- 154 オーストロネシア語族に関する比較言語学は、ドイツのオットー・デンプヴォルフによってその基礎が確立された（1938年）。これにより、古代日本語と南島諸語の比較を行う前提条件が整い、音体系や語彙に関する類似が指摘されるようになった。
- 155 言語の系統が同じというのは厳密には、同じ1つの言語（祖語）から発達したことが言語データをもって実証的に証明できるということである。
- 156 崎山（1990:100）：「一般的な認識としては、日本語の語順や後置詞は北方系、開音節であることや語彙の一部は南方系とみなされている」。
- 157 言語レベルで見れば、統語レベルにアルタイ系の要素が見られ、音声・アクセント・イントネーションなどの音声レベルや、語・句をなす形態レベル（特に接頭辞＋名詞・動詞・形容詞）に南方系の類型が見出されるとされる。例えば、

日本語の起源

接頭辞はアルタイ系言語には存在せず、一方オーストロネシア諸語には多く見られる現象である。

158 Robbeets, M., Bouckaert, R., Conte, M. et al. (2021) などである。

159 例えば代名詞基幹子音を備えていたといった特徴である。

160 吉田 (2015:150)。こうした特徴を保持したまま、環日本海言語圏の一部の話し手が大規模な移動を行い、環太平洋言語圏一帯に広がったと捉えることができよう。さらに、南北アメリカ大陸にも、これらの特徴が保持され拡張したというふうに理解できるであろう。

161 言語族が東部のステップから移動するにつれて牧畜遊牧民によって広められたとする牧畜仮説とは異なる。

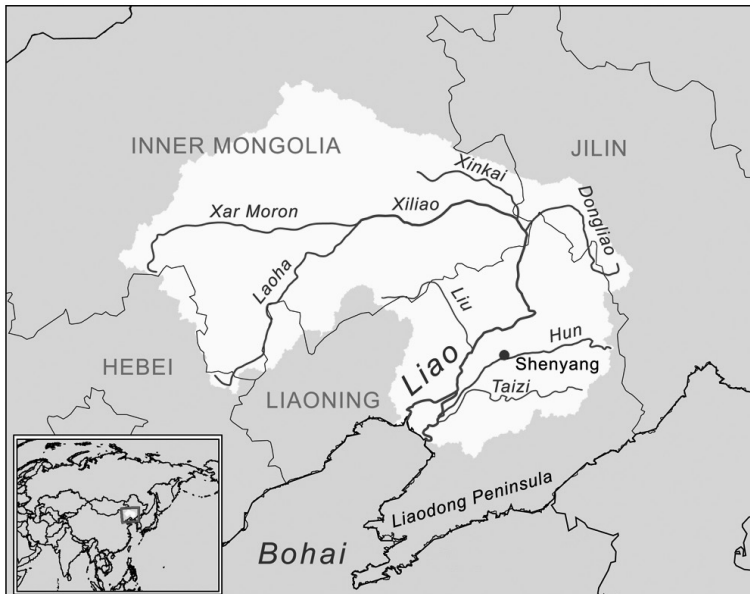
162 遺伝子の系統と言語の系統の地理的な分布は確かに必ずしも一致するとは限らない。

163 ここでいう Japonic の年代は紀元前 2100 ± 175 年と想定されている。

164 紀元前 3 世紀に稲作が九州に伝わったとされている。

165 Robbeets, M., Bouckaert, R., Conte, M. et al. (2021)

166 言語の発端として次の図の黄色の部分まで辿れるであろうことが近年、明らかになりつつある。



日本語の起源

- 167 新石器時代後期、アムール地域遺伝子を持つキビ・アワ農耕民が北東アジアの隣接する地域に広まった。
- 168 借用によるものも多くあろう。
- 169 崎山（1990:100）
- 170 崎山（1990:120）
- 171 崎山（1990）
- 172 言語系統としてオーストロネシア語族といっても、統一的・包括的な類型があるわけではない。
- 173 確かにサンスクリットからの借用語の数は著しい。
- 174 ポリネシア諸語が文法・語彙においてマライ諸語と親縁関係にあると、それらを統べる名称として「南海諸語」（Südsee-Sprachen）と呼んでいる。
- 175 Kawi は本来「詩人」を意味する。ここでは詩人たちのことばという意味に用いられている（泉井 1975:17）。
- 176 オランダ語で Oudjavaansch.
- 177 太字はサンスクリット借用語。
- 178 『ラーマーヤナ』などの翻訳がある。
- 179 マレー語が広くインドネシア各地の交易語として用いられているのは、土着の人々が古くから航海通交のことばとして使用していたばかりでなく、この地に来たポルトガル人・オランダ人が初めにマレー語の人たちと接しインドネシア各地で交用語として用いたためでもある。なお、マレー語はマレー半島の土着の言語ではなかった。この半島はもともと他の系統の諸言語（南アジア語系のセマング語、サカイ語、ジャクン語など）が占める語域であった。13-15 世紀、マレー語は南方スマトラ、ジョホールの方面から次第に北上して遂に半島の主流言語となったと考えられている（泉井 1975:14-15）。碑文や文献から判明する限り、マレー語が成立したのは紀元後 7 世紀である（崎山 2017:12）。

参考文献

- 赤坂憲雄（2010）『増補版 遠野 / 物語』 荒蝦夷
- 阿刀田高（1991）『旧約聖書を知っていますか』 新潮社
- 荒木一雄・安井 稔 編（1992）『現代英文法辞典』 三省堂
- 荒俣 宏（1994）『南方に死す』 集英社文庫
- 池上二良（1978）「アルタイ語系統論」『岩波講座 日本語 12 日本語の系統と歴史』
- 池澤夏樹（2000）『ハワイ紀行』 新潮文庫
- 石橋幸太郎（1973）『現代英語学辞典』 成美堂
- 石森大知（2020）「宗教 メラネシアの世界観とキリスト教」『オセアニアで学ぶ人類学』（梅崎昌裕・風間計博 編）2020, p.155-168. 昭和堂
- 石森大知・丹羽典生（2019）『太平洋諸島の歴史を知るために 60 章』 明石書店
- 泉井久之助（1952）「日本語の系統について（序説）——日本語とフィノ・ウグール諸語」『言語の研究』 有信堂
- 泉井久之助（1953）「日本語と南島諸語——系譜関係か、寄与の関係か——」『民族学研究』 17 巻 2 号
- 泉井久之助（1975）『マライ・ポリネシア諸語——比較と系統——』 弘文堂
- 板橋義三（2001）：「アルタイ諸言語（含朝鮮語）と日本語」『言語研究』 120, p.106-116.
- 板橋義三（2015）：「日本語の源流と形成」『日本生理人類学会誌』 20-1, p.45-53.
- 井上章一（2009）『伊勢神宮 魅惑の日本建築』 講談社
- 井上光貞（2003）『日本書記』 中公クラシックス（中央公論新社）
- 岩波講座（1978）『日本語 12 日本語の系統と歴史』 岩波書店
岩波書店（2004）『フィールドワークは楽しい』 岩波書店
- 印東道子（2017）『島に住む人類 オセアニアの楽園創世記』 臨川書店
- 上田正昭（1986）『藤原不比等』 朝日新聞社
- 上田正昭（1998）『「記」「紀」の成立とその意義』『日本古代史「記紀・風土記」総覧』（別冊歴史読本）新人物往來社, p.22-29.
- 上田正昭（1998）『歴史と人物』 上田正昭著作集 第七巻、角川書店
- 江上波夫・大野 晋（1973）『古代日本語の謎』 毎日新聞社
- 大角 翠（2003）『少数言語をめぐる 10 の旅 フィールドワークの最前線から』 三省堂
- 大角 翠（2018）『言語学者のニューカレドニア』 大修館書店
- 大塚高信・中島文雄（1982）『新英語学辞典』 研究社

日本語の起源

- 大野 晋 (1957) 『日本語の起源』 岩波新書
- 大野 晋 (1980) 『日本語の系統』 至文堂
- 大野 晋 (1981) 『日本語とタミル語』 新潮社
- 大野 晋 (1994) 『日本語の起源 新版』 岩波書店
- 大野 晋 (1996) 「『タミル語＝日本語同系説に対する批判』を検証する」『日本研究』第15集 (国際日本文化研究センター)
- 大野 晋 (2000) 『日本語の形成』 岩波書店
- 大野 晋・柴田 武 (1978) 『日本語の系統と歴史』 岩波書店
- 大林太良 (1991) 『神話の系譜』 講談社学術文庫
- 荻野蔵平・齋藤治之 (2005) 『ドイツ語史小辞典』 同学社
- 小野林太郎 (2018) 『海の人類史——東南アジア・オセアニア海域の考古学』 (環太平洋文明叢書) 雄山閣
- 長田俊樹 他 (1996) 「日本語＝タミル語同系説を検証する——大野晋『日本語の起源 新版』をめぐって」『日本研究』第13集 (国際日本文化研究センター)
- 長田俊樹 (2005) : 「日本語の混淆言語説」『表現における越境』 vol.36:169 ~ 182.
- 長田俊樹 (2017) : 「はたして言語学者はふがいないのか——日本語系統論の一断面」井上章一 (編) 『学問をしるもの』 p.10-29.
- 長田俊樹 (2020) : 『日本語「起源」論の歴史と展望——日本語の起源はどのように論じられてきたか』 三省堂
- 長田夏樹 (1972) 『原始日本語研究－日本語系統論への試み』 神戸学術出版
- 長田夏樹 (1979) 『邪馬台国の言語』 学生社
- 小沢重男 (1968) 『古代日本語とモンゴル語』
- 小沢重男 (1976) 『日本語の系統』 大修館書店
- 海部陽介 (2016) 『日本人はどこから来たのか?』 文藝春秋
- 風間喜代三 (1978) 『言語学の誕生』 岩波新書
- 片山一道 (1991) 『ポリネシア人——石器時代の遠洋航海者たち』 同朋舎
- 片山一道 (1996) : 「アメリカ大陸とオセアニアへの拡散——モンゴロイド物語——」 in 片山一道 他 (編) 『人間史をたどる：自然人類学入門』 1996, p.78-99. 朝倉書店
- 片山一道 (2002) 『海のモンゴロイド』 吉川弘文堂
- 亀井 孝 (1963) 『日本語の系統』 平凡社
- 亀井 孝 (1973) 『日本語系統のみち』 吉川弘文堂
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1988-2001) 『言語学大辞典』 三省堂

日本語の起源

- 川島敦夫（1995）『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店
- 川添 登（2010）『木と水の建築 伊勢神宮』筑摩書房
- 川本崇雄（1978）『南から来た日本語』三省堂
- 川本崇雄（1986）「日本語と同系の可能性の最も高い言語」日本語語源研究会 編『語源探求』明治書院
- 岸本通夫（1971）『ユーラシア語族の可能性』神戸学術出版
- 京極夏彦（2014）『遠野物語拾遺 retold』角川学芸出版
- 京都大学文学研究科（2015）『日本語の起源と古代日本語』臨川書店
- 金田一京助 他（1951）「日本語の系統について」『国語学』5（金田一京助・松本信廣・泉井久之助・服部四郎・亀井孝・河野六郎）
- 江 実（1974）：「ニューギニアの NAN 語について」『言語研究』65, p.84-85.
- 江 実（1978）：「日本語はどこから来たか：北と南から見た日本語」in 大野晋・祖父江孝男（編）『現代のエスプリ 臨時増刊号 日本人の原点 1 形質・考古・神話・言語』p.272-304. 至文堂
- 江 実（1980）：「バプア語と日本語との比較研究：基礎語彙による」『日本語
- 小泉 保（1987）「日本語系統論の足跡」馬淵和夫『日本語の起源』武蔵野書院 p.2-22.
- 小泉 保（1989）「比較言語学の立場から見た日本語の系統論」『季刊 邪馬台国』38
- 小泉 保（1998）『縄文語の発見』青土社
- 高津春繁（1954）『印欧語比較文法』岩波全書
- 高津春繁（1992）『比較言語学入門』岩波書店
- 後藤 明（1997）『ハワイ・南太平洋の神話』中公新書
- 後藤 明（2002）『南島の神話』中公文庫
- 後藤 明（2003）『海を渡ったモンゴロイド』講談社
- 後藤 明（2017）『世界神話学入門』講談社現代新書
- 駒田利治（2009）『伊勢神宮に仕える皇女・斎宮跡』新泉社
- 斎藤成也（1996）：「ヒトさまざま——遺伝子でたどる地球上の人間模様——」『人間史をたどる：自然人類学入門』（片山一道 他 編）1996, p.144-155. 朝倉書店
- 斎藤成也（2020）：「ゲノムデータと言語データの関係」in 長田俊樹（編）：『日本語「起源」論の歴史と展望——日本語の起源はどのように論じられてきたか』三省堂 p.253-267.
- 阪倉篤義（1977）『日本語の語源』講談社
- 崎山 理（1978）「南方諸語との系統的關係」in 大野晋（編）『岩波講座 日本語 12 日本語の系統と歴史』p.99-150.

日本語の起源

- 崎山 理 (1990) 『日本語の形成』 三省堂
- 崎山 理 (1990) 「日本語系統論関係著作・論文目録」 村山七郎『日本語の起源と語源』
三一書房 p.407-456.
- 崎山 理 (1993) 「オセアニア・琉球・日本の国生み神話と不完全な子: アマンの起源」『国
立民族学博物館研究報告』 18-1 p.1-14.
- 崎山 理 (2017) 『日本語「形成」論 日本語史における系統と混合』 三省堂
- 崎山 理・宮岡伯人 (2002) 『消滅の危機に瀕した世界の言語』 明石書店
- 佐佐木隆 (1978) 「日本語の系統論史」 in 大野晋 (編) 『岩波講座 日本語 12 日本語の系統
と歴史』 p.301-346.
- 司馬遼太郎 (1973) 『陸奥のみち、肥薩のみち』 街道をゆく 3、朝日新聞出版
- 篠達喜彦・荒俣 宏 (1994) 『楽園考古学』 平凡社
- 篠達喜彦・荒俣 宏 (2003) 『南海文明グランドクルーズ——南太平洋は古代史の謎を秘め
る——』 平凡社
- 下宮忠雄 (1992) 『ドイツ語源小辞典』 同学社
- 下宮忠雄 (1999) 『歴史比較言語学入門』 開拓社
- 下宮忠雄・川島敦夫・日置孝次郎編著 (1985, 1994⁴) 『言語学小辞典』 同学社
- 下宮忠雄・金子貞雄・家村睦 (1989) 『スタンダード英語語源辞典』 大修館書店
- 庄垣内正弘 (2002) 「板橋義三『アルタイ諸言語(含朝鮮語)と日本語』に対するコメント」
『言語研究』 121, p.112-121.
- 新村 出 (1935) 『国語系統論』 明治書院
- 鈴木良次 他 編 (2006) 『言語科学の百科辞典』 丸善
- 田村圓澄 (2009) 『伊勢神宮の成立』 吉川弘文館
- 千田俊太郎 (2020) 「パプア諸語と日本語の源流」 in 長田俊樹 (編) 『日本語「起源」論
の歴史と展望——日本語の起源はどのように論じられてきたか』 p.127-152.
- 千野栄一 (1992) 「非インド・ヨーロッパ語の研究」 in 宮岡伯人 (1992) : 『北の言語: 類
型と歴史』 三省堂 p.363-379.
- 筑紫申真 (2002) 『アマテラスの誕生』 講談社学術文庫
- 寺澤芳雄 (1997) 『英語語源辞典』 研究社
- 寺澤芳雄 (2002) 『英語学用語辞典』 研究社
- 朱鷺田ときた祐介 (2006) 『海の神話』 新紀元社
- 直木孝次郎 (1964) 『日本古代の氏族と天皇』 塙書房
- 直木孝次郎 (1995) 「『古事記』『日本書記』の成立過程」 in 『別冊歴史読本『古事記』『日

日本語の起源

本書記』の謎』 p.5-22.

直木孝次郎 (2001)「藤原・平城・難波三都の宮殿——大陸風建築の採用からみた——」in『飛鳥に学ぶ』(飛鳥保存財団設立 30 年記念号) (財) 飛鳥保存財団 p.62-65.

中島平三 (2006)『言語の辞典』朝倉書店

中野イツ (1981)『斎宮物語』辻いんさつ

中本正智 (1992)『日本語の系譜』青土社

西田龍雄 (1976)「日本語の系統を求めて——日本語とチベット・ビルマ語」『月刊言語』vol.5:6 ~ 8

日本言語学会 (1973) シンポウジウム『日本語の起源』(泉井久之助・江上波夫・大野晋・大林太良・崎山理・村山七郎)

橋本萬太郎 (1978)『言語類型地理論』弘文堂

埴原和郎 (1990)『日本人新起源論』角川選書

埴原和郎 (1993)『日本人と日本文化の形成』朝倉書店

バック Buck, Peter / 鈴木満男 訳 (1966)『偉大なる航海者たち』現代教養文庫 (社会思想社)

服部四郎 (1959)『日本語の系統』岩波書店

服部四郎 (1971)『言語の系統と歴史』岩波書店

服部四郎 (1999)『日本語の系統』岩波文庫

ブーガンヴィル、レイ・アントワース Bougainville, Louis Antoine de, comte (1990)『世界周航記』(山本淳一 訳) 岩波書店

林 一馬 (1997)「伊勢神宮成立史考」『建築史学』28 (0), p.127-152.

藤原 明 (1981)『日本語はどこから来たか』講談社

平凡社 (1963)『日本語の歴史』

堀井令以知 (1997)『比較言語学を学ぶ』世界思想社

ベルウッド、ピーター Bellwood, Peter (1989)『太平洋：東南アジアとオセアニアの歴史』(植木武・服部研二 訳) 法政大学出版局

ポインヤント、ロズリン Poignant, Roslyn (1967) *Oceanic Mythology : The Myths of Polynesia, Micronesia, Melanesia, Australia*.『オセアニア神話』(豊田由貴夫 訳) 青土社 1993

穂積裕昌 (2013)『伊勢神宮の考古学』雄山閣

堀井令以知 (1997)『比較言語学を学ぶ』世界思想社

ポリワノフ、エフゲニー Polivanov, Yevgeny (1976)『日本語研究』(村山七郎訳) 弘文堂

松浪 有 (1983)『大修館英語学事典』大修館書店

松本克己 (1996)「日本語の系統」諏訪春雄・川上湊編『日本人の出現——胎動期の民族

日本語の起源

と文化』雄山閣

松本克己 (2000) 「日本語の系統と『ウラル・アルタイ説』」『日本エドワード・サピア協会研究年報』14:1-25.

松本克己 (2001) 「日本語の系統：回顧と展望」『言語研究』第120号

松本克己 (2007) 『世界言語のなかの日本語 日本語系統論の新たな地平』三省堂

馬淵和夫 (1985) 「日本語の『系統論』もしくは『成立論』のために」日本語の系統を考える会 編『日本語の系統・基礎論文集1』和泉書院 p.34-59.

馬淵和夫 編 (1985) 『日本語の起源』武蔵野書院ミラー Miller, Roy Andrew / 村山七郎・山本啓二・下内充 訳 (1982) 『日本語の起源』筑摩書房ベルウッド、ピーター (1989) 『太平洋：東南アジアとオセアニアの歴史』(植木武・服部研二 訳) 法政大学出版局

宮岡伯人 (1992) 『北の言語：類型と歴史』三省堂

宮岡伯人 (2015) 『「語」とはなにか・再考 日本語文法と「文字の陥穽」』三省堂

宮岡伯人・崎山 理 (2002) 『消滅の危機に瀕した世界の言語』明石書店

村山七郎 (1961) 「国語系統論・比較研究の歴史」『国語国文学研究史大成』15 三省堂

村山七郎 (1974) 『日本語の語源』弘文堂

村山七郎 (1974) 『日本語の探求方法』弘文堂

村山七郎 (1978) 『日本語系統の探求』大修館書店

村山七郎 (1979) 『日本語の誕生』筑摩書房

村山七郎 (1981) 『日本語の起源をめぐる論争』三一書房

村山七郎 (1988) 『日本語の起源と語源』三一書房

村山七郎・大林太良 (1973) 『日本語の起源』弘文堂

メイエ Meillet, Antoine / 泉井久之助 訳 (1954) 『世界の言語』Les langues du monde 朝日新聞社

矢島文夫 (2013) 『世界の文字大事典』朝倉書店

安井稔 (1996) 『コンサイス英文法辞典』三省堂

安田俊朗 (2020) 「1940年代の日本語系統論——「放埒」と「禁欲」のあいだ——」in 長田俊樹 (編) 『日本語「起源」論の歴史と展望——日本語の起源はどのように論じられてきたか』 p.33-52.

安本美典 (1985) 『日本語の起源を探る』PHP

安本美典 (1991) 『日本人と日本語の起源』毎日新聞社

安本美典 (1994) 「研究史・文献目録 日本語の起源」大野 晋『日本語の起源 新版』岩波書店 p.12-35.

日本語の起源

- 安本美典・本多正久（1978）『日本語の誕生』大修館書店
- 柳田国男（1957）『史料としての伝説』村山書店
- 山田仁史（2017）『新・神話学入門』朝倉書店
- 吉田敦彦（1992）『昔話の考古学』中公新書
- 吉田和彦（2005）『比較言語学の視点』大修館書店
- 吉田和彦（2015）「松本克己先生の『私の日本語系統論』に対するコメント」京都大学文学研究科『日本語の起源と古代日本語』臨川書店 p.143-153.
- 渡部忠世（1993）『稲の大道——「稲の道」からみる日本の文化』小学館
- Althaus, Hans P.・Henne, Helmut・Wiegand, Herbert E.: „*Lexikon der Germanistischen Linguistik*“, Bd. 1,2,3,4, Max Niemmeyer Verlag, Tübingen 1980（2）
- Behaghel, Otto (1856-1936): „*Die deutsche Sprache*“. 1. Auflage. (1886), 1904 (3. Aufl.), 1907 (4. Aufl.), 1954 (11. Aufl.), Wiesbaden 1927; „*Deutsche Syntax*“, I-IV , Heidelberg, 1923–1928
- Bellwood, Peter (1984-85) “A hypothesis for Austronesian origins”, *Asian Perspectives* 26 (1) : 107-117.
- Bellwood, Peter S. (1994) “An archaeologist’s view of language macrofamily relations”, *Oceanic Linguistics* 33 (2) : 391-406.
- Blust, R.A. (1988) ‘*The Austronesian homeland: a linguistic perspective*,’ *Asian Perspective*, 26:45-67.
- Brugmann, Karl : „*Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen*“, Straßburg 1886 – 1893; Brugmann, Karl/ Delbrück, Belthold : „*Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*“, 5 Bände, Straßburg 1886-1900 ;
- Bopp, Franz 1816 : „*Über die Konjugationssystem der Sanskritsprache in Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen und germanischen Sprache*“, Frankfurt am Main
- Bopp, Franz ,1833, 1835, 1842, 1847, 1849, 1852: „*Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Zend, Armenischen, Griechischen, Lateinischen, Litauischen, Altslavischen, Gotischen und Deutschen*“, Berlin
- Buschau, Georg ブシヤン (1944) : „*Illustrierte Völkerkunde*“ 小堀甚二 訳『圖解民族學』聖紀書房
- Comrie, Bernard et al. (eds) (1996) *The atlas of languages*. New York : Facts On File, Inc.

- Conrad, Rudi (1978) : „*Kleines Wörterbuch sprachwissenschaftlicher Termini*“, VEB Bibliographisches Institut Leipzig
- Crystal, David クリスタル : 『言語学百科辞典』 “*The Cambridge Encyclopedia of the English Language*”, Cambridge: Cambridge University Press, 1995. 2nd ed. 2003、大修館書店 1992
- Delbrück, Berthold (1842-1922) : „*Das altindische Verbum*“, Halle 1874; „*Grundfragen der Sprachforschung*“. Straßburg 1901: „*Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen*“, 3 Bände. Trübner, Straßburg 1893-1900: „*Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen*“, 6. Aufl. Breitkopf und Haertel, Leipzig 1919: „*Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen*“, 6. Aufl. Breitkopf und Haertel, Leipzig 1919.
- Dixon, R.M.W. : *The rise and fall of languages*. Cambridge University Press, 1997
- Gardt, Andreas (1999) : „*Geschichte der Sprachwissenschaft in Deutschland*“, de Gruyter, Berlin/New York,
- Glück, Helmut, Schmoe, Friedrich: „*Metzler Lexikon Sprache*“, mit 30 Abbildungen und 12 vierfarbigen Karte, Metyger, Stuttgart 2005
- Guy, Jacque B. (1988) „Rjabchikov's Decipherments Examined.“ *Journal of the Polynesian Society* 97: 321-323.
- Hirt, Hermann (1865-1936): „*Indogermanische Grammatik*“, 7 Bde. Heidelberg 1927-1937: „*Handbuch des Urgermanischen*“, 3 Teile, Heidelberg 1931-1934: „*Die Hauptprobleme der indogermanischen Sprachwissenschaft*“, Halle 1939
- Hirt, Hermann (1865-1936): „*Indogermanische Grammatik*“, 7 Bde Heidelberg 1927-1937: „*Handbuch des Urgermanischen*“, 3 Teile, Heidelberg 1931-1934: „*Die Hauptprobleme der indogermanischen Sprachwissenschaft*“, Halle 1939
- Izawa T. et al. (2008) “Deletion in a gene associated with grain size increased yields during rice domestication”, *Nature Genetics*, 40 (8) : 1023-1028.
- Kausen, Ernst: „*Die indogermanischen Sprachen. Von der Vorgeschichte bis zur Gegenwart*“, Helmut Buske Verlag, Hamburg 2012
- Kluge, Wilhelm : „*Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*“, Trübner, Straßburg 1883, 25. Auflage. de Gruyter, Berlin 2011; „*Unser Deutsch. Einführung in die Muttersprache. Vorträge und Aufsätze*“, Quelle & Meyer, Leipzig 1907
- Krahe, H. 1985: „*Indogermanische Sprachwissenschaft*“. Teil I: Einleitung und Lautlehre.

- Teil II: Formenlehre, Sammlung Götschen, de Gruyter, Berlin・New York, 1985/8/1
- Lehmann, Winfred P.: „Historical Linguistics“, 3. edition, London and New York 1992
- Lockwood, W.B. ロックウッド 1969: „Indo-European Philology. historical and comparative“; 永野芳郎訳: 『比較言語学入門』 大修館書店 1976
- Lockwood, W.B. ロックウッド 1972: „A Panorama of Indo-European Languages“; 岩本忠訳 『インド・ヨーロッパ諸語の展望』 三修社 1987
- Meier-Brügger, Michael: „Indogermanische Sprachwissenschaft“, 8. völlig neugearbeitete Auflage der früheren Darstellung von Hans Krahe, de Gruyter, Berlin/New York 2002
- Meillet, Antoine (1866-1936): „Les origines indo-européennes des mètres grecs“, Paris: Presses Universitaires de France, 1923; 1903: „Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes“, Paris 1903.: „Les dialectes indo-européens“, 1908: „Introduction l'étude comparative des langues indoeuropéennes“, Paris 1924: „Linguistique historique et linguistique générale“, 2 vols. C. Klincksieck, Paris 1921, 1936
- Meillet, Antoine / 泉井久之助 訳 (1979) 『史的言語学における比較の方法』 La méthode comparative en linguistique historique, Oslo : H. Aschehoug & Co. みすず書房
- ミラー R.A. / 西田龍雄 監訳 (1981) 『日本語とアルタイ諸語』 Japanese and the other Altaic languages, University of Chicago Press 1971 大修館書店
- ミラー R.A. / 村山七郎 他訳 (1982) 『日本語の起源』 Origins of the Japanese language, Univ. of Washington Press 1980 筑摩書房
- Onions, C. T. : “Oxford Dictionary of English Etymology”, Oxford University Press, 1966
- Osthoff, Hermann (1847-1909): „Morphologische Untersuchungen auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen“, Hildesheim, New York : Olms, Nachdr. d. Ausg. 1878-90, Leipzig
- Paul, Hermann パウル (1846-1921): „Prinzipien der Sprachgeschichte“, 1880 (aktuell: 10. Auflage 1995: „Grundriß der germanischen Philologie“, 2 Bände) Tübingen, Niemeyer
- 福本喜之助 訳 『言語史原理』 講談社学術文庫 1965
- Paul, Hermann (1846-1921): „Deutsche Grammatik“, 5 Bände, Halle, 1916-1920
- Pedersen, Holger ペデルセン 1924: „Sprogvidenskaben i der Nittende Aarhundrede: Meroderog Resulater“; 伊藤只正 訳 『言語学史』 こびあん書房 1974
- Price, Glanville 1988, 2000 : “Encyclopedia of the Languages of Europe”; 松本克己監訳 『ヨーロッパ言語辞典』 2003
- Robbeets, M., Bouckaert, R., Conte, M. et al. (2021) Triangulation supports agricultural

- spread of the Transeurasian languages. *Nature* 599, 616–621.
- Robins, R. H. ロービンス : “A short History of Linguistics”, 3 (rd) Edition, London 1990 ; 中村完・後藤斉訳 : 『言語学史』、150 頁、研究社出版 1992
- Rjabchikov, Sergej V. (1987) „Progress Report on the Decipherment of the Easter Island Writing System.“ *Journal of the Polynesian Society* 97: 313-320.
- Schlegel, Friedrich von フリードリッヒ・シュレーゲル : „Über die Sprache und Weisheit der Inder“ (1806, Heidelberg) ; 山本定祐 他 訳「インド人の言語と知性について」『ドイツ・ロマン派全集 第12 巻 シュレーゲル』国書刊行会 1990
- Schleicher, August 1861,1871: „*Compendium der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*” 1861, 3. Aufl. 1871 Weimar
- Schmidt, J. 1872: „*Die Verwandtschaftsverhältnisse der indogermanischen Sprachen*“, Weimar
- Schmitt-Brandt , R. (1998) : „*Einführung in die Indogermanistik*“, Tübingen/Basel
- Shipley , Joseph T. (1969) : „*Dictionary of Word Origins (non-fiction)*”, Philosophical Library, 1945, then Greenwood Press, 1969;
- Szemerényi, Oswald: „*Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*“. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1990 (4. Aufl.)
- Tichy, Eva (2000) : „*Indogermanistisches Grundwissen*“, Hempen, Bremen
- Tryon, Darrell: „*Oceanic Encounters Exchange, Desire, Violence*“, ANU, Canberra 2009.
- Winfried, Ulrich: „*Wörterbuch Linguistische Grundbegriffe*“, Berlin-Stuttgart 2002
- Witzel, Michael E.J. (2012) *The Origins of the World's Mythologies*. Oxford University Press.
- Wurm Stephen A. (eds) (1996) *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas*. Trends in Linguistics Documentation 13. Berlin/New York : Mouton de Gruyter.